
Eternal Love

月久麻子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l L o v e

【Nコード】

N1700U

【作者名】

月久麻子

【あらすじ】

目が覚めると見知らぬ世界。高校球児・風羽廉はその世界で出会ったとある国の王・デイから説明を受け、自分がこの世界を救うべく呼ばれたことを知る。混乱と葛藤、そして愛。異世界で廉が選ぶ道は……。

第一章：第一話（前書き）

予告なく性描写が入る場合があるのでご注意ください。ただし、第一章に関してはそこまで激しい描写はありません。

第一章：第一話

「何なんだよ、これはっ！」

見慣れない石造りの階段を全力で駆け下りながら俺は後ろを振り返りもせずひたすらに逃げた。

「お待ち下さい！」

何人も人が逃げる俺を追ってくる。

追われて逃げているのにそう言われて待つ奴がいるとでも思っているのだろうか。

「お待ち下さいっ！」

何度目かのそのセリフに俺は階段を駆け下りながら後ろをチラリと見やった。何人いるのだろう。見慣れない格好をした、いや、見慣れない所の話じゃない。

おかしい、どう見てもゲームの中でしかお見かけしないような服装をしているのだ。俺を追いかけてきている奴らは。

そんな奴らにいきなり追いかけられている自分の現状が何よりも信じがたいのだが、いかんせん何がどうなってこんなことになったのか、訳が分からないのだ。

確かに俺はついさっきまで自分の部屋に居たはずだ。なのについ朝二度寝をしてしまって。そして目が覚めたらここに居た。

壁も天井も全てが石造りで出来ている、明らかに自分の部屋ではない場所。その部屋の中心に据えられたこれまた石で出来た台の上に目が覚めると俺は居て、その周りには数人の見慣れない格好をした人間がいた。

そいつらは俺を見ると何か歓喜の声をあげていたが、そんな連中に俺は恐怖しか覚えず一瞬の隙について脱兎のごとく逃げ出したのだ。その部屋を飛び出すとすぐに石造りの螺旋階段が続いていて、ようやくここがどこか塔のような場所なのだと分かった。

分かったからと言って事態が変わる訳でもないのだけれども。

とにかく、俺はひたすらに逃げた。勘とでも言うのだろうか。第六感的な何かが逃げろと言っていて、捕まったらやばいことになりそうな気配がプンプンしている。

本能に従い逃げ始めてかなり経ったのだが。降りても降りてもこの階段が終わる気配がない。壁沿いに螺旋状に続くこの階段は不親切にも手すりの類が一切なく、足を踏み外せば真っ逆さまに落ちて死んでしまうだろう。

「・・・くそっ」

それでも俺は全力で逃げ続けた。幸いなのは下階から挟みうちにされていないことだけ。

尽きない体力に感謝をしながら俺はがむしゃらに階段を駆け下り続け、そして階段の途中に出口らしきものから漏れる光を目にした。

「！」

ここに逃げ込めばあいつらをまけるかもしれない。少しの躊躇もなく俺は石の壁にぱっくりと開いた扉も何もない、ただぼんやりとした光だけを放つそこに飛び込んだ。

「・・・え？」

普段からよく物事を考えて行動をしろと言われ続けてきた言葉が不意に頭をよぎった。

慣性の法則に従い飛び出した俺の体はもちろんいきなり止まるはずもない。でもあれだけ階段を下ったんだ、誰だってそのまま床なり何なりと足元があると思うじゃないか。

けどそうじゃなかった。俺の足元には何もない、予想していた地面が。

こんな時案外頭は冷静に働いていて、俺は自分の目に飛び込んできた景色を普通に見ていた。上には空が、そして下には広大な森が広がっていて。

俺の体は中空に放り出された形になっていたのだ。足は何もない場所を蹴っていた。

まさかこんなことになるなんて思ってもいなかった俺は、ゆっくり

とした動作で後ろを振り返る。するとさっきまで俺を追いかけていた連中が慌てふためいて俺に向かって手を伸ばしているのが、見えた。

このまま行けば落ちるのは明白だ。とっさに俺は体を振って手を伸ばしそいつらの手を掴もうとしたが、もう遅かった。

「えーーーーーっ!？」

自分の絶叫を聞きながら俺は真っ逆さまに森へと落ちていってしまった。

風を切る音が耳に、迫り来る木々が視界に。

何かに掴まろうにも周りには掴めるようなものは何もなく、それにあたふんあったとしてもこの落ちていく速度では掴めやしなかったと思う。

俺は頭の中に走馬灯が走るのを感じながら考えた。

意味が分からん。そうだ、これはきっと夢だ。俺はまだ部屋で転寝をしていてその夢なんだ。高い所から落ちる夢ってよくあるじゃないか。起きる前とかはよくあるじゃないか。

これもそうなんだ。それにしちゃ、いやに全てがリアルだけれど。

「これは夢、これは夢。」

念仏のように唱えながら俺は早く目が覚めろ!と痛切に願った。

「早く目が覚めろったら!」

ひたすらに落下を続けながら俺は絶叫した。もの凄い勢いで木立の先端が近づいていて、これが夢だと分かっているにもかかわらず恐怖を覚えてしまう。

俺は堪えきれず固く目を閉じた、次の瞬間。

俺は木々の群れの中に突っ込んだ。枝が体中に当たり、折れる音が耳元で聞こえる。

たとえば木に引っかけた所で、あの高さから落ちたのだ。このままじゃやばい。

そう思った俺は何とか枝に腕を伸ばし掴もうとするが、映画のよう

にうまくはいかないものでことごとく掴み損ねてしまう。声を上げる間もなく目前に地面が現れた。

「っ！」

訪れるであろう衝撃に俺は反射的に目を閉じてしまった、のだが。驚くほどやんわりと俺は地面に辿りついてしまったのだ。衝撃なんでもものはまるでなく、大きな手にそっと横たえられたような。

「・・・あれ？」

閉じた目を恐る恐る開くとそこには土と草がある、間違いなく俺が横たわっているここは地面だ。

俺はむくりと体を起こした。自分の体を確認してみるが、木の枝でついた切り傷以外に怪我はなく、立ち上がってみてもすっかり立ち上がれて骨折なんてしている気配すらない。

「・・・あれ？」

どうして俺、無事なんだ。

よく覚えてないけど地面に着く瞬間、一瞬体が浮いたような気がしたんだけど。気のせいなのだろうか。

俺は首をかしげ、上を見た。空は木に阻まれて全く見えないし、その木も見ることがないくらいに高い。この木から落ちただけでも死んでしまうだろう高さなのに、俺はその何倍の高さから落ちてきたのにも関わらずどうして無事でいるんだ？

俺はただ呆然と上を見上げ続けるだけだったが、ふと我に返る。

「これ・・・夢じゃない？」

いきなりこんな訳の分からない場所にいるのに、これは十中八九夢じゃない。のかもしれない、と俺は思った。

夢にしてはリアルすぎるからだ。

体に負ったかすり傷もぴりぴりと痛むし、血も滲んでる。それに肌を撫でる風も、大地を踏みしめている感触も、濃い緑の匂いも全てが現実のものと一緒だった。

「夢じゃないなら、何なんだここは。」

呆然とするしかなかった。

ためしに木肌に手を押し当ててみると、まぎれもなく木に触れている感触がする。

続けて俺は自分の頬を思いっきり抓ってみた。

「いて！」

痛い。夢だったらこれで目を覚ますはずなのに。

「マジで夢じゃないのか？」

それならばどうしたらいいんだろう。こんなことは生まれて初めての体験だ。

辺りをきよろきよろと見回してみても、木以外のものは何も視界には入ってこない。

ふとそこで疑問に思った。

俺は塔みたいな所から落ちた。いくらそこから飛び出したからと言って、どうして側にそれらしい建物がないんだ？

あそこに戻るの嫌だけど、あまりにも周りには木しかなくて不安になってしまう。

「ちょっと・・・歩いてみるか・・・」

このままここでこうしていても何も始まらない。

恐らくこの場所は俺の知らない場所だ。出来れば元居た所に戻りたいし。

俺は大きく伸びをして、そして小さくため息をついてからゆっくりと歩き出したのだった。

それからどれくらい歩いたのか。相変わらず景色は木ばかりで、空も見えないので時間の感覚も方向感覚も掴めない。

あいにく時間が分かるものを一切、というか、身に着けている服以外のものは何も持っていなかったので今が何時なのかさっぱり分からない。高く生い茂った木のせいで分かりにくいのが、太陽は昇っているようだから多分夜ではない。

おまけに食料も水も何もない。

いい加減、疲れたし喉も渴いてきている。

「……人は……、人はいないのか……」

一体どれだけ歩いたのか、結構な距離を歩いたはずなのに全くもって景色が変わらないってどういうことなんだ。

「おーい！ 誰かいませんかー！」

声を張り上げてみるも、何の返答もない。

むなしくなってしまうくらいに何も返ってこない。

俺はがっくりと肩を落とした。誰にも会わなくてもいいからせめて、水が欲しい。

思わず座り込んでしまった俺に、助けの手は差し伸べられない。盛大にため息をついていると、不意にふわりと柔らかな風が吹いた。不思議な優しい風に包まれて荒みかけていた気持ちが落ち着いた気がした。

「……よし。」

こうしてふてくされていてもどうしようもない。俺は再度立ち上がった。

「こっちに行ってみよう。」

包まれた優しい風に誘われるかのように俺は歩き出す。

そして少し歩くと、驚くことにすぐに池が目前に現れたのだ。

それまでであった木々がまるでぽっかりと抜け落ちたように、そこに泉はあった。信じがたい光景に俺は走ってその淵まで行くとその水の中に手を突っ込んだ。

「……冷たい」

すくって口につけ、一気にそれを飲み干す。喉が渴いているせいもあるかもしれないけど、驚くほど美味しかった。気が済むまで水を飲み、そしてついでに顔も洗う。

「あー……、生き返るー。」

俺はズボンの裾を捲り上げ歩き続けてほてった足を泉に突っ込んだ。そしてそのまましばらくと後ろに倒れこむ。

この森に落ちて、初めて見る空だった。

果てしなく遠い空に向かって高い木々が伸びている。これだけ高さ

のある木なら今まで空が見えなかったのにも頷ける。

「ここはどこなんだろう。」

もう何度そう思ったのか。いくら考えても答えなんて出やしない。これからどうすればいいんだろう、さっきの連中を見つけ出してどうして俺がここにいるのか問いただした方がいいのか。でもどうしてもあいつらには関わりたくないと何かが告げているのも確かだ。

「・・・はぁ・・・」

盛大にため息をつく。
がさり。

ため息とほぼ同時に俺がいる場所とは反対の所から音がした。体を起こすと森の中から動物が姿を現す所だった。

その姿に俺は目を剥く。今まで見たこともないような大きさと姿をした動物だった。

「え？あれ、何？」

誰もいないにも関わらず俺は一人そう言っていた。

何と言ったらいいのだろう。それは一見熊のようにも見えるけど、虎のような縞模様が体に刻まれ尾も長い。熊と虎を足して二で割ったような生物だった。けれど体格は熊の倍はあるかもしれない。

低く唸る声が俺の耳にも届く。

明らかに俺を警戒していた。これはやばいんじゃないだろうか。

俺は音を立てないように泉から足を抜き、立ち上がれる体勢を取った。目線はその生物からは離さないまま。

確か、獰猛な生物に出会ってしまったら目を離してはいけないと聞いたことがあったのだ。

第一章：第二話

「こっちに来るなよー、俺はお前には何もするつもりはないからな。」

じりじりと後ろに下がりながらそいつに聞こえるようにそう言った。たぶんこれは夢ではないはず、だったら死んでしまったら終わりだ。きつと。

額に汗が滲み始めるのを感じながら俺はそいつから目を離さないまま少しづつ後ろに下がった。あともう少し離れたら一気に逃げようと思っていた。

しかしそう簡単には物事は進まないのだ。

俺が立ち上がり一気に走り出そうとした瞬間、そいつはあろうことか泉も俺すらも飛び越えて俺の目の前に立ちはだかった。

声も出ない。

見上げたそいつは三メートルは背丈があった。そして手には鋭い爪と、鋭い牙がある。

攻撃されたら終わりだ。低く唸り声を発しながら顔を近づけてくるそいつに俺は目を閉じた。

ああ、こんなわけの分からない場所で見も知らぬ生物に食い殺される運命なんてあんまりだ。結構、清く正しく生きてきたはずなのにこれはないだろう。

案外そんなシチュエーションになると頭は変な方向に物を考え始めるのだなあ、などと思いつつ俺はそいつの牙が体に食い込むのを待った。けれどいつまで経ってもその衝撃はやってこない。

「・・・・・・？」

恐る恐る目を開けると視界いっぱいにはそいつの顔があった。息を呑み真っ直ぐにそいつに視線をやっていると不意に唸り声が止む。

あ、と思うのと同時にそいつが俺の顔を舐めた。

「いたたたたっ！」

噛み砕かれるよりは遥かに軽いだろう痛みにも、俺は悲鳴を上げた。それを気にする様子もなくそいつは何度も俺の顔を舐め上げて、仕舞いにはごろごろと喉を鳴らし始めたのだ。

「痛い！痛いって！何なんだよ、お前。」

引き剥がそうとそいつの顔に手をかけ押しつけようとするがピクリもしない。俺の何倍もの体格のあるそいつを押しつけられるはずはないとは分かっていたけどしかし舐められているだけでも十分に痛いのだ。

こいつ、舌に棘っぽいのがあるのにそんなで舐められたって痛いだけなんだよ、などと内心悪態をつきつつ俺は必死にそいつを押しつけようと頑張った。そして気づく。

「……ん？」

こいつの体、超柔らかくないか？体って言うか。

「お前、すごい毛並みしてるなあ。」

舐められながらもモフモフとそいつの体を撫でると、そいつの動きがぴたりと止まった。

不思議そうに俺を覗き込んでくるそいつの目はさっきまでの獰猛なそれとは違った穏やかな色をしていた。

「何、触られるの嫌だったのか？」

慌てて手を放すが、反対にそいつが俺の手に体を擦り付けてこようとした。撫でてもらいたいらしい。こいつの外見に恐怖して一瞬忘れただけ、俺動物好きなんだよな。

舐められるのは御免だがこいつの毛並みに触れるのは気持ちが良いので俺は遠慮なくそいつに抱きつきその毛並みを堪能した。

「何だ、見た目とは違っていい奴だな。お前。」

ぎゅうぎゅうと抱きつきながら俺はそいつの毛に顔を埋めた。極上の毛布に包まってるみたいだ。

「気持ちいい。」

俺は思う存分その毛並みを肌で楽しんだ。ひとしきり楽しんだから体を起こしそいつの顔を覗きこんだ。

「なあ、お前ここがどこなのか知らないか？」

いつしか腹ばいになって俺の側でくつろいだ様子を見せているそいつに俺は声をかけた。しかし返事など当然戻って来やしない。

分かつてはいたけどさ。

がつくりと肩を落としながらもそいつの顔を撫でつけながら俺は周りを見回した。この現状について俺なりに考えてみた。にわかには信じがたいけれどやっぱりこれは。

ここは。

「・・・異世界とかってやつかなあ・・・」

自分が住んでいた場所とはかけ離れた環境、そしてこの生物。地球上にこんな生物は間違ってもいないはずだ。それならばそうでない場所としか考えられなかった。

ならどうして俺が？何の為に。

いくら考えたって分からない。考えるには元にする材料があまりに少なすぎるのだ。

「もし戻れなかったら、俺ずっとここで生きてかなきゃならないのかなあ。」

家族も友達も誰もいない、慣れ親しんだ環境でもない。学校での生活は楽しいし何より部活があるのに。俺はもう何度目なのか分からないため息をついた。

「・・・今年こそ甲子園に行けると思ってたのに。もうすぐ予選大会始まるのに。」

もし帰れなかったらどうすればいいんだろう。

今年が甲子園に行ける最後のチャンスなのにこんなわけの分からない状況になってしまふなんて考えてもいなかった。

帰りたい。

頭にあるのはそれだけだった。

「・・・ん？」

あまりに俺が落ち込んでしまっていたからか、それに気がついたのか目の前の獣はぐるぐると喉を鳴らし長い尻尾を俺の顔の前で振っ

た。

俺の腕ほどもあるその尻尾をぎゅっと掴むと俺はそいつの肩に顔を埋めた。

慰めてくれているみたいだ。

「優しいんだな、お前。」

こんな見てくれなのに。生き物を外見で判断したら駄目だな。

俺はふと笑みを浮かべ顔を上げると不思議そうな表情をしているそいつの目の上に優しく口付けた。こんな場所でも自分をいたわってくれる生き物がいるのは嬉しかった。

「なあ、俺これからどうしたらいいんだろう。」

そいつを撫でながら一人呟く。

不意に、何かに気づいたかのようにそいつが体を強張らせた。続けて低い唸り声を発し始める。

「・・・どうか、したのか？」

俺の背後に向かって威嚇をするかのように鋭い声を上げるそいつの様子に、俺は後ろを振り返った。

シュン。

耳元を空気が裂く音が通り過ぎるのが聞こえたのと同時に、さっきまで唸り声を上げていた獣が凄まじい悲鳴をあげた。

びりびりと空気が振動するかのようなそれに俺は慌ててそいつを振り返ると、肩の辺りに一本の弓が突き刺さっている。

「・・・なんで！」

俺はその突き刺さっている弓に手をかけ抜こうとした。が、見た目以上に食い込んでいるのかびくともしない。

もしかしてさっきの連中がここに来たのだろうか。俺は獣を背後に庇うように後ろに向き直った。木々の間から数人の男が現れたのはその時だった。

さっきの連中じゃない。服装も体格も、雰囲気も違っていたからそれだけは分かった。

「早くそいつから離れるんだ！」

中でも一番体格のいい男が低い声を張り上げて俺に向かってそう言い放つ。

「は？」

いきなり攻撃をしかけておいて何を言ってるんだ。襲われているようにでも見えたのか。

「早くしろ！そいつは獰猛なんだ、食い殺されるぞ！」

男の言葉に俺の背後で唸っていた獣が一際高く吼えた。怒りと恐怖に怯えた声。

それを聞いて俺は無性に腹が立った。

「いきなり攻撃することないだろ！俺は襲われてなんかいない！」俺は獣を庇うように両手を広げた。

まさか俺がそんな態度を示すとは思ってもいなかったのか、現れたそいつらは一様に顔を見合わせた。

「あんたらがいきなり攻撃したりするから、こいつだって人を襲うんじゃないのか！」

「何を言っているんだ。そいつの凶暴さを知らないのか？」

まるでこいつが凶暴性しか持ち合わせていないかのような発言に怒りが頂点に達する。

「俺は襲われてなんかいない。見て分かんないのか、バカ！」

俺が男たちと睨み合っていると背後の獣が切り裂くような咆哮を上げた。それに臆したのか男たちが全員手に持っていた弓矢を一斉に構える。

獣の怒りが肌に伝わってくる。恐らく、次の一手が放たれたらこいつは男たちに襲い掛かってしまうだろう。

一触即発の空気に俺は飲み込まれそうになる。

「やめろ。あんたらが手を出さなければこいつは何もしない。」

「どの道それは関係ない。そいつは今までに何人もの人間を食い殺してきている、ここで見つけられたのはチャンスだ。そいつを殺さねばこの森はいつまで経っても危険なまま。」

「それじゃあ、もうこいつに人を殺さないように言い聞かせる。だ

からこいつに構うのはもうやめろ。あんたらが手を出すからこいつだって攻撃をするんだ。」

「……獣に、言っただけ聞かせるだろ？」

男は呆れたと言わんばかりにそう言う。とすぐさま声を上げて笑い出した。

「そいつは人を襲うしか能のない、頭の足りない生き物だ。そんなものに言い聞かせてどうする？」

頭から決めかかった物言いにカチンとくるが、ここで俺がキレたら間違いなく獣が暴れだしてしまう。俺は唇を噛んで必死に怒りをやりすごそうとした。

「俺がずっとこいつの側にいて人を襲わないように見張ってる。それならいいだろ。」

「駄目だ。そいつはあまりに多くの人を殺した。もう死の他に償う方法などない。」

笑いを収めると男は冷たい声で言った。構えられた弓が俺にどくようにと横に振られる。

ギリギリと引き絞られる弦の音がここまで届くようだった。俺が知っているものよりも一回り大きく、矢も太い。これが何本も刺さったらこの獣でも致命傷を負うどころか死んでしまうはずだ。

「……っ、どうして……」

男の言い分も分からないでもないし、言っている言葉は恐らく真実なのだろう。男がそう言うのであればこの獣はきつと今までたくさんの人を殺してきたのかもしれない、だからもう許せないのだと。だけど、男たちが言っている言葉にも疑問を抱く。

俺に見せた態度とは全く違う姿をこの獣は見せていた。俺の側で安心しきっているように見えたのだ。それはつまり、今までこの獣は心の底から安堵することなど出来ず、常に何かに怯えていたから人を襲ったんじゃないのか。

「これが最後の忠告だ。……どけ、小僧。」

獣の前に立ちはだかったまま動こうとしない俺に業を煮やしたのか、

男が低く言い放つ。

それでも俺はどかなかった。

避ければすぐさま矢が放たれこの獣は殺されてしまう。

俺は固く目を瞑った。瞼の裏にさっきまでの穏やかな獣の姿が浮かびあがる。

殺させるわけにはいかない。どんな生物であつたとしても自分に優しさを向けてくれたことを、ないがしろには出来なかった。

俺は目を開くと男たちを静かに一瞥した。それを答えと受け取ったのか小さく男が息をついたように見えた。でもそんなのは知ったことじゃない。

背後からは変わらず獣の唸り声が聞こえてくる。怯えきった声にしか、俺には聞こえなかった。こいつは怖がっているんだ。

男たちの言い分も分かるけど、俺にはそれが全て真実だとは思わない。

急に腹の底からこれまでとは違う怒りが込み上げてきた。内臓を焼いてしまうんじゃないかと思うくらいに熱い。

この熱は一体何なんだ。そう思いながらも俺はどんどん熱が集中してくるのを感じていた。

ギリリと弓を引き絞る音が鳴るのが耳に届いた。男たちの手が僅かに動く。

矢を放つつもりか。

「やめろ！」

体内の熱が限界まで熱くなって、俺はそれを吐き出すように絶叫した。すると俺の声と怒りに呼応するかのように激しい突風がその場に吹き荒れる。

男たちが堪えきれずに吹き飛ばされた。しかし俺と話をしていた男だけが何とかそれに耐え、すぐに体勢を整えまた矢を射ろうとしてくるがその表情は訝しげなものに変わっていた。

「やめろって言ってんだろ！」

俺の声が衝撃波となって男は後ろの森に弾き飛ばされ、姿を消した。

俺は荒い呼吸を繰り返し男たちが消えた場所を見据えた。

一体何が起こったのか分からないけど、背後の獣が殺される危機は回避できたのかもしれない。

後ろを振り返ると獣はさっきまであらわにしていた怒りをすっかり潜めさせ、大地に腹ばいになっていた。肩に刺さっている矢が痛々しい。

「大丈夫か？」

優しく頭を撫でるとすぐに顔を摺り寄せてくる。

「……怖かっただろ？」

頭を抱きしめると喉がグルグルと鳴った。このまま矢が突き刺さったままだと危ない。

俺はそつとその矢を手を持った。力を込めるまでもなく、すんなりとその矢は抜けた。最初に抜こうとした時はびくともしなかったのに。

けれどそれを疑問にも思わず俺は矢を抜いたばかりの傷口に手を押し当てた。溢れる血が止まらない。

「……治して（……）やる（……）よ（……）」

何故そう言ったのか分からないけど、俺はこの時確信をしていた。自分にはこいつの怪我が治せると。

手の平に意識を集中させるとさっきまで腹にあった熱が手の平に集まり出す。風が俺たちを中心に吹くと手に集まった熱は獣に伝わるように消えていった。

そつと手を放すともう血は止まり、傷口もなくなっていた。

「良かった。」

ホッと息をつき、俺は獣を抱きしめた。

「なあ、お前さ……人を襲わないようにすることって出来るか？ そしたらきつとお前も危ない目には遭わないと思うんだ。それで、もっと森の奥まで行ってなるべく人に会わないように暮らしたら、もうきつとお前は怖くならない。」

出来るか？と目を覗き込むと、獣の目はすっかり穏やかな色に染ま

っ
て
い
て
。

「・・・ありがと。無理言ってごめんな。」

頭を撫でてやると獣は嬉しそうに喉を鳴らした。

「・・・驚いたな。」

聞き覚えのある声が後ろから投げかけられ、俺はそっちに振り向いた。そこには最後に吹き飛んだ男が立っていた。

「・・・まだ何か用でもあるのか？こいつはもう人は襲わないって今俺と約束をしてくれた。殺すってんなら・・・」

「早まるな。そうじゃない。」

男は兜を脱ぐと一歩俺たちに近づいてきた。

「本当にジャモンを手なづけたんだな。まるで別の生き物を見ているようだ。」

さっきまでとは打って変わった語調の柔らかさに俺は構えていた体から力を抜いた。

そんな俺に気づいたのかまた一歩、男が近づいてくる。しかし獣が低く唸り声を発し始める。

こいつジャモンって名前なんだ・・・可愛くない名前だ。

「ちょっと待って。悪いんだけどさ、近づくんなら武装を解いてからにしてよ。」

手の平を男に向けて近づいてくれるな、と静止させる。

「武装？だがもう武器は持ってないが・・・」

「そうじゃなくて。その鎧？みたいなのも全部取ってよ。じゃないとこいつ怖がるから。」

「・・・ふむ。」

男は顎に手を当てて少し考える素振りを見せたが、素直に鎧を全て脱ぎ落として見せた。

「これでいいか？」

暗にまだ近づきたいという意志を読み取り、俺はジャモンを振り返る。未だ警戒心は解いていないようだけど、唸るのをやめたジャモンを見て俺は「大丈夫っぽい」と男に言った。

男はゆっくりと一歩ずつ俺たちに近づいてきた。

鎧と兜を取って分かったが、男はかなり若かった。そして見たこともないような見事な銀髪と灰色の瞳をしていておまけにかなり男前だ。体軀もがっしりとしていて、かなり強そうだった。

男は俺たちのすぐ側にまで近づいてようやく足を止めた。

「ジャモンは、こんなに穏やかな表情をする生き物だったんだな。初めて知った。」

「……あんたらが怖がらせるからだろ。何もしなきゃ、こいつだってただ生きているだけの生き物なんだよ。どうせちよつと見た目が怖いからってすぐに攻撃しかけてたんだろ？」

「……そうだな。」

男は苦笑を浮かべ大きな手をジャモンに向かって伸ばした。一瞬びくりと体を震わせたが俺が頭を撫でるとその強張りを解いて大人しく男に体を撫でさせる。

「今まですまなかった。」

ジャモンは尻尾を振り、自分に触れている男の手を軽く叩いた。男が俺をチラリと見る。

「……もういいよって、言ってるのかな？」

そう言う男は目じりを下げて笑った。

「ところで、さっきの君の力は一体何なんだ？」

「力？」

「風を操っただろう。」

「……知らない。」

「だが、俺たちを吹き飛ばしたじゃないか。あれは間違いなく君から発せられたものだった。」

「だから、知らないって。俺は何もしてないよ。」

そう言えばさっきそんなことがあった。確かに俺の言葉と同時に強い風が吹いたけど、あんなの偶然じゃないのか？俺にはそんな力はない。至って普通の高校生でしかないのに。

しかし俺の言葉に納得出来ないのか男は首を傾げる。

「それに、ジャモンの傷が癒えている。これは君が治したんだろう？」

「・・・それは、そうだけど。」

「君は術者なのか？」

「違うよ。」

「では何故こんな力が使える？イリツィアの国の者か？」

初めて聞く国名だった。それを聞いて俺はやっぱり、と思う。

間違いなくここは俺の知っている世界じゃない。改めて実感をする
と少し気落ちしてしまう。

「イリ・・・？なんだかよく分からないけど、その国の人間じゃない
よ。」

「ではどこの国だ。俺たちの国に君のような色はない、だからカー
ミアの国の者でもないはずだ。」

また新しい国名。これもまるで聞き覚えがない。てか、色って何だ？

「その、カーミアって国の人間でもないよ。もういいじゃん、俺の
ことは。」

「良くないんだ。君の使った力は・・・」

男は言いかけて、そして言い躊躇った。その目は困惑すらしている
ように見える。

「君の使った力はたった一人にしか使えないものだと言われている
んだ。それを、君は使った。つまり君は。」

男は信じられないと表情でありありと告げていた。俺にはその顔の
意味が分からなくてつい眉をひそめてしまう。何だか探りを入れら
れているようで気分が悪い。

「デイ様！」

会話が途切れたのは誰かの声がその場に響き渡ったからだだった。デ
イと呼ばれ目の前の男は声のした方に向き直る。するとすぐに数人
の男たちが俺と話をしていた男にかけ寄ってくる。

「デイ様、危険です。ジャモンが！」

「いい。あれはもう危害は加えん。」

「ですが！」

「大丈夫だと言っている。その少年が約束をしてくれた。」

男たちはデイの言葉に一斉に俺に視線を投げかけてきた。非常に居心地が悪い。

「あのさ・・・、もうこいつは大丈夫だから。あんた達もう国に帰りなよ。」

俺はジャモンの首に腕を回し一步後ろに下がった。ジャモンが尾を俺の体にスルリと巻きつけてくる。その様子を目にした兵士らしき男たちはその光景に目を見開いた。

寧猛なはずのジャモンが人間に懐いている様なんで見たことがなかったんだろうな、と内心思いながらもやはり面白くない。

「国には帰ろう。だが、君にも来てもらわなければならぬ。」

「・・・は？」

「君の力が我々には必要なんだ。」

「・・・言ってる意味がよく分からないんだけど。」

「それは国に帰ってから教えよう。とりあえず、一緒に来てくれ。」
手が差し伸べられて、俺はそれをジッと見つめた。

恐らくこのデイと呼ばれた男は他の奴らより偉くて、そして俺について何かを知っている。この判断が正しいのか間違っているのかは分からないけど、このままここに残っても俺にはなす術はないはずだ。

だけ。

「俺は行かない。」

「どうして。」

「俺が行ったらジャモンが独りになるだろ。もうしばらくは、一緒に居てやりたいんだ。」

「・・・なるほど。」

それ以上に、さっきまで敵対していた人間にほいほいついていくのとはつきり言えばバカでしかない。ジャモンのことに理解を示してはくれたけど、本当にいい奴なのかどうかはまだ分からない、この

デイという男についていくのはまだ躊躇われた。

「出来れば君の気持ちを尊重してやりたいが、生憎俺たちには時間がないんだ。すまないが、ついてきて欲しい。無理強いはしたくない。」

はつきりと拒絶を示した俺に、デイは同じく拒絶を返してきた。

これには俺も言葉に詰まる。いい人かもしれないと思ったのは撤回だ。

「それは強制するってこと？」

「強制はしたくない。大人しく我々についてきてくれないか？」

「いやだって言ったら？」

「その時は強引に連れて行くことになってしまう。」

「どっちみち連れて行くんだ。」

俺はジャモンに強く抱きついた。ジャモンならこいつらから逃げるのは簡単だろう、泉を飛び越える脚力があるんだ、きっと走るのも速いはず。だけどそうしたらせっかくのジャモンの印象がまた悪くなってしまうかもしれない。

行きたくはない。行った方が何かしら進展すると分かっている。俺の気持ちを察したのかジャモンがまた低く唸り声を発し始めた。兵士たちがそれに身構え弓をこちらへ向けてくる。

「やめろ。弓を下ろせ。」

「ですが・・・」

「ジャモンを刺激するな。」

デイの強い口調に兵士たちは躊躇いながらも弓を下ろした。

「君の安全と自由は必ず保障する、約束する。」

「どうやってそれを信じろって言うんだ？」

「確かに今の君には信じてもらえないのは承知している。それだけのことを俺たちはした。だが、これは俺たちだけの問題ではないことなんだ。君がこのまま姿を消してしまえばこの世界は終わってしまう。」

「・・・世界が、終わる？」

「君の存在はこの世界を救う唯一つの手段なんだ。頼む、国民を犠牲にしたくないんだ。」

デイの眼差しは真剣そのもので、嘘なんて言っていないだろうことは伝わってくる。

話を聞くにはつまり、俺はよくあるロープレで言う所のキーパーソンの存在としてこの世界に呼ばれた人間、って感じだろうか。いきなり世界がどうこう言われてもまるで現実味がないし、俺がそんなことをしなきゃならない義務も全くない。

断って逃げることも、ジャモンと一緒になら出来るはずだ。でも。追われて逃げるのもさっきのでこりごりって気持ちも同じくらいある。それに勝負師としては、逃げるのは性に合わない。

駆け引きが大好きな生粋のピッチャーなもんで。

俺はデイに視線を投げかけたままジャモンの耳に口を押し当て小さく呟いた。そして表情を伺うと、ジャモンは真っ直ぐに俺を見つめ返してくる。

どうやらオーケーがもらえたようだ。

「分かった、あんたについて行ってもいいよ。けど一つ条件がある。」

「・・・何だ？」

「ジャモンも連れて行く、これを吞んでくれないなら俺は行かない。」

「それはっ、難しいことを言ってくれるな。」

初めて見るデイの困惑した表情だった。

「俺は初対面でさっきまで敵対してたあんたを信用してついて行くんだ、だったらあんたも俺を信用してよ。約束する、絶対にジャモンに人は襲わせない。」

「・・・どうしても、その条件を呑まなければ駄目か？」

「今の所、俺が心の底から信頼出来るのはジャモンだけなんだ。」

ジャモンは今までたくさんの人を殺してきたのだろう。そんな獣をデイの国に連れて帰ればパニックになるのは容易に想像が出来る。

だけど、これを呑んでくれるのなら俺はデイを信用することが出来るかもしれない。

絶対に譲れなかった。

デイは考え込んでいるのか、沈黙が広がる。その後ろでは兵士たちが同じく困惑した表情を浮かべていた。中にははっきりとした敵意を向けてくる奴もいる。

ジャモンに大事な人を殺されたのだろうか。

俺は自分がどれだけ勝手なことを言っているのか、自覚はしていた。それでもこれはどうしても譲れないから。

「……分かった。」

「デイ様！」

「彼は約束をしてくれた。その上で我々を信用して来てくれると。ならば我々も彼を信用しよう。」

決断を下したデイに兵士の一人が反論の声を上げるが、静かに放たれたデイの言葉に口を閉ざす。

「ありがと。」

俺はデイに向かって微笑んだ。デイも苦笑を浮かべてみせる。

「君は不思議な子供だな。」

「……そうか？」

手を差し伸べられたので俺はデイに近づきその手を取った。大きな固い手の平だ。

「名前を、教えてくれるか？」

そう言えば名前も名乗ってなかったな。

「俺は廉、風羽廉。」

「……レン。俺はデイ・フィリスだ。」

固く握り締め合った手からは温もりが伝わってきた。

「よろしく。」

「ああ、こちらこそ。」

これが俺とデイ・フィリスとの出会いだった。まさかこれから先、誰よりも深く俺に関わってくる人間だなんてこの時は全く思いもし

なかったのは、まあ・・当然だよな。

第一章：第三話

デイに連れられて向かった国には俺たちが居た場所から割とすぐに着いた。移動手段が馬とかではなくてでっかい鳥だったことにはさすがに俺も驚いたけど。

あれ、怪鳥って言うのかな。この世界の動物は基本的にみんなサイズが大きいのもかもしれない、などと思った。

そのまま真っ直ぐに城に案内をされた。

「デイは城に住んでるんだ？」

「・・・ああ。」

唇の端だけで笑って見せると門をくぐり抜けさっさと中に入って行ってしまった。俺はジャモンとその後に行く。あまり人目のない道を通ってきたのだろう、城内に入るまではジャモンは誰にも目撃されず騒ぎにはならなかった。そこまでは。

しかしさすがに城の内部ともなると人も居る。ジャモンすら易々と通れる城の扉をくぐるとあちこちで悲鳴が上がり始めた。

「デイ・・・あのさ。」

「分かっている、ジャモンを連れてこっちへ。」

一直線にどこかへ向かっている様子のデイに俺は黙ってついて行く。悲鳴を上げて逃げまどう城の人々を見かねたのかデイは時折「大丈夫だ」と声を投げかけていた。

これは、相当ジャモンは嫌われ者みたいだな。

チラリとジャモンを見やるが、何も気にした様子もなくジャモンは俺の後について歩いてくる。

繊細なんだか図太いんだか、よく分からない奴だ。内心俺はため息をついてしまった。

そしてようやく辿りついたのかある扉をくぐり抜けると、デイが足を止めた。

「ここ？」

たどり着いた先は天井はあるけれど中庭のような、緑が溢れる場所だった。そして広い。

「ここにほとんど人は来ない。ジャモンも、ここに居れば問題は起きないだろう。」

振り返るとデイは奥へ来るようにと俺たちを促した。誘われるままに俺はデイに近づいた。ジャモンは何度か鼻を鳴らし、一人さっさと奥の茂みの向こうへと姿を消してしまった。

「どうやら気に入ってくれたようだな。」

ホッとした様子でデイが言った。

「・・・ありがとう、でもいいのか？」

「何がだ？」

「勝手にジャモンの部屋にして、王様とかに怒られない？」

「心配ない。俺が、この国の王だからな。」

デイの言葉に一瞬俺の頭は思考停止してしまう。

「・・・え？デイって王様なの？」

「ああ。王、と言うか・・・この国を統べる者と言った方が正しいか。」

「いや、同じ意味だと思うんだけど。・・・へえ、そうだったんだ。」

王様とは露知らず、今まで俺はどれだけ偉そうな口を叩いてきたんだろう。知っていても礼儀正しく振舞えたかどうかは話が別だけど、どうにも偉い人って苦手なんだよなあ、俺。

「レン、まずは礼を言わせて欲しい。」

「俺、何もしてないけど。」

「この国の王としてだ。俺を信用してついて来てくれて感謝している。これから君には難題が降りかかるかもしれないが、全力で君を守るとまず・・・ここに誓う。」

デイは俺の前に片膝を落とし頭を下げる。それに慌てたのは俺だった。

「ちょ、やめてくれよそんなこと！」

ばたばたと手を振ってデイを引き起こそうと肩に手をかける。するとその手を強く掴まれた。

「君を待ち受けている困難は、恐らく君の想像を遥かに超えるものだ。その道へ引きずり込んでしまったことは謝って済むことではない。」

「・・・え？そんなに大変なことなのか？」

「・・・君がどう受け取るかにもよって変わってくると思うが。」不安に表情を曇らせた俺に、デイは済まなさそうに眉を下げた。

「俺、一体何をしなきゃならないんだ？」

デイの言葉をどう受け止めたらいいいのか俺には理解出来なかった。困難であるのかそうでないのか、それに引きずり込んだってどういう意味なんだろう。

デイは俺の質問には答えず、立ち上がると俺の頭に手を置きぐしゃぐしゃと髪を撫でた。

「今日は疲れただろう。話は明日にして、今日はもう風呂に入って休むといい。」

「や、大丈夫だって。出来ることなら俺、早く自分の世界に帰りたいんだ。時間が必要でないことならさっさと終わらせたいんだけど。」

長居をしたくないって訳じゃない、こんな経験一生に一度あるのが珍しいんだから思う存分堪能したい気持ちは山ほどある。けど異世界物のロープレとかってよく、戻ったとき自分の世界の時間がとんでもなく過ぎていたりするパターンってあるから。浦島効果ってやつ。

だから、もしそうならやばいんだ。俺には元の世界でどうしてもやらなきゃならないことがあるのに。

「何か急ぎの用事でもあるのか？」

「急ぎって言うか・・・」

デイは俺の頭に置いていた手を引っ込めるとまた眉根を寄せる。こんなに大きな体をして、立派な大人の男の人で、国王だって言う

のになんだろう。捨てられた子犬みたいな顔をするなんてちょっと以外だと俺は思った。

「どうだろう、もし良かったらレンの話を聞かせてもらえないだろうか。」

「俺の？」

「無理にとは言わないが・・・」

これがもし自分の世界の出来事で、今日始めて出会った人に「君の事を聞かせて欲しい」なんて言われたって俺は絶対に答えたりしなかった。

俺自身も非常に不思議なんだけど、どうも心の奥底ではデイをすっかり信用しきってしまっているみたいなんだ。ほんと、不思議でしようがないんだけど。

いきなり見知らぬ世界に来てしまったのに、どうして呼ばれたのかその理由を聞く前に自分のことを話すなんて変だよなと思いつつも「うーん・・・じゃあさ、俺のこと話すから世界樹云々の前にデイのことも教えてよ。こういうのって信頼関係ってあったほうがいいんだろ？」

俺の取り柄、ポジティブすぎることに。ニカッと笑って見せるとデイは固くしていた表情をフツと緩め、拳を口元に押し当てながら抑えきれない笑いを堪えていた。

「そうだな、そう思ってもらえるのなら嬉しいな。」

「じゃあ決まり。」

そうと決まれば話は早い。俺はデイに案内されジャモンのいる中庭から場所を移し、ある部屋に通された。

豪華絢爛って言葉はこの為にあるんだろうな、と部屋に通された俺は部屋の中央で呆然とするばかりだった。誰もが知ってる超有名ナントカホテルのスイートルームが、確かテレビで紹介された時こんな感じの内装だったと思う。

「レンが滞在する間はこの部屋を使うといい。」

「・・・うえっ！ここ？」

さらりとんでもないことを抜かすデイに俺の返事はひっくり返ってしまっていた。

「……この城で一番良い客室なんだが……レンには失礼に当たるだろうか……」

「い、いやいや……そうじゃなくて。」

見当違いな心配をしてくるデイに俺は慌てて手と首を振った。むしろこの部屋じゃなくてもっと質素な……ベッドしかないような部屋でいいのに。

「こんな豪華な部屋じゃなくて……いいんだけど……」

「レンは客人だ、出来る最高のもてなしをするのは当然のこと。」
キッパリと言い切ったデイにこれ以上部屋をどうのとはとてもじゃないけれど言えなかった、目つきが半端なく真剣なんだ。

うーん、はつきり言ってこれはどうしたらいいのか分からない。けど、目の前に居るデイは俺がどんなに他がいいと言っても譲ってはいくれないのだろうなあと思った俺は、

「……分かった……ありがと、デイ。ありがたく使わせてもらいます。」

ありがたく案内されたこの豪華な部屋を使わせてもらうことを決めた。こんな豪華な部屋に泊まれることなんてきつともうこの先ないだろうから、楽しめる所は楽しんでおかないと。

とても現実とは思えないこの世界は、しかし間違いなく現実のものだ。なら、出来る限り楽しまなきゃむしろ損なんじゃない？

デイは俺のことを事細かに聞きたがったので、出来る限りデイが分かる言葉で説明をした。年齢、趣味、家族構成。学生で学校に通っていると言口にする「学校とは何だ？」と説明を求められてしまい四苦八苦しながら何とか説明を試みたが、自分が理解して当然だと思っているものの説明をするのは意外にも難しく大変だった。自分が知っていて相手が知らないとなるとなお更に。

なんと、この世界にはどうやら学校ってものがないみたいなのだ。

じゃあ勉強はどうしているかと訊ねると、

「勉強は富裕層しかしないのがほとんどだ。覚えても意味の無いことを民はしない。」

なんて返事が返ってきた。どうも親の職業をそのまま引き継ぐのが当然のことであり、例外は唯一希望者のみが城で訓練を受け、兵士なり剣士なり戦士なりと国を守る・軍隊に配属されるのだとか。

「じゃあ一般の人達って本とか読まないんだ？」

「話を読んで聞かせる役目の人間が居るからな。」

「買い物する時の計算とかは？」

「そのくらいは親が教えることになっている。簡単な読み書きと計算、生きていく上で必要なルールと知恵は親が教える・故に、親となる者の責任はこの世界では非常に重いんだ。」

「・・・へえ・・・」

聞けば聞くほど異世界、まるで俺の世界と成り立ちが違った。

「でも選択肢がないってのはちょっと辛いね。」

「選択肢？」

デイは意味が理解出来ないと首を捻る。

「俺の世界って、自分がやりたいことをやれるんだ。例えば・・・農家に生まれても商人になれるし、学校の先生にもなれるし、飲食店だって経営出来るよ。」

「親の跡は継がないのか？」

「もちろん継ぐ人も居るよ。でも、継がない人も居る。それは悪いことじゃないからね。」

デイは感心しきったように俺の話を聞いていた。根本の考え方が違うから、全てが新鮮なんだろうと思う。俺だってデイの話を聞いていてそう思うし。

「レンの家は何をされているんだ？」

話が面白いのか、俺の世界の話に入ってからデイの表情は穏やかな笑みになっていた。新しい知識を与えられようとしている子供のような、輝いた目。

俺よりも随分年上のはずなのに、違和感がないのがおかしくて仕方なかった。

「俺の家は建築家・・・家の設計をして建てるってのを父さんがやってて、一番上の兄さんが跡を継ぐことになってるよ。」

「立派な仕事をされているんだな。」

「・・・そう？」

家族のことを褒められて嬉しくない奴なんていないだろ、と俺ははにかんだ笑みをデイに返した。

「そうすると・・・レンは一体何になるんだ？跡目は兄上殿が継がれるのだろう？」

「俺？・・・俺はなれるのならプロ野球の選手かな。」

単純な疑問だったのだろう、デイがそう聞いてきたので俺はあらかじめ自分の中にあつた答えを簡単に答える。

「プロ・・・ヤキュウ・・・？」

全くもって意味が理解出来ないと言を捻るデイに俺は苦笑いを浮かべた。分からないだろうことは分かっていたけどこれを説明するとなると相当時間がかかるんだけどなあ・・・と内心困ってしまうが、しかし野球大好きなこの俺が逃げる訳にはいかない。

異世界にだって広めてやろうじゃないか、と腹を据え口を開いた。

「野球ってのはね・・・」

まずはルール説明をして、続けて使う道具を説明しようとしたけど口だけでは見たこともないものを説明するのはやっぱり難しく、途中でデイに紙とペンを借りてそれを使ったり、身振り手振りを加えたりしてどんどん説明を進めていく。

デイは俺の説明に相槌を打ったり、感心したため息をついたりしながら延々と続く俺の説明に飽きた様子も見せずと俺の説明を聞いてくれた。

「・・・って感じかな。で、プロになるってのがこの野球だけをして生きていける人。なるのはすごい大変なんだけどね。」

「なるほど・・・複雑だが、面白そうだ。そんな文化が発展してる

のだな、レンの世界は。」

「この世界にはそう言ったスポーツとかはないんだ？」

「民は皆、日々の生活で手一杯でな。・・ゆとりある生活をさせてやれない俺が悪いのだろうが・・だがいつかは、こんなスポーツが出来るくらい豊かにしてやりたい。」

俺が説明に使った紙を手に取り、複雑そうな笑みを浮かべてみせるデイに俺は王様って大変なんだなあとつくづく思った。自分のことだけじゃなくて国のことも考えなきゃならないんだもん、俺だったら絶対に無理だな。

「デイは大変なんだな。俺なんて毎日野球ばかりやってるだけだし、目標なんて目下甲子園出場だから自分のことしか考えてないのに・・・」

「・・・コウシエン？」

ニューワードに敏感に反応を示すデイはどうやら野球に結構な感心を向けてくれているようで、説明した甲斐があったと俺は無性に嬉しくなってしまった。

「甲子園は高校生だけが参戦出来る大会で、地区予選を勝ち抜いてきた強豪校同士で戦い合って日本一を決める大会なんだ。俺、今高校三年で今年が最後のチャンスだからどうしても出場したいんだ。」

そう、だから早く自分の世界に戻りたい。戻って練習をしてどうしても甲子園に出場したい・・これは約束だから。

「俺がこっちに居る間に俺の世界の時間が物凄く過ぎてしまうってことはない、よね？」

俺の質問にデイはすまなさそうに顔を顰め、

「それは分からない。」

と言った。

「過去に元の世界に戻った者が再びこの世界に戻ってきたことは今までに一度もないんだ。だから戻った時がどうだったのかというのは、俺達に知る術はなくてな。」

「・・・・・」

今、デイは何て言った？・何が引つかかったんだけど。

「すまない、レン。だがレンが望むのならば・・出来るだけ早く全てを終えられるよう俺も尽力しよう。」

けれど考えはデイの言葉に遮られてしまった。いたわりの態度を向けられ俺の意識は再びデイへと戻る。

「・・・デイ。」

そうだ、俺はまだ知らない。自分がこの世界にどうして呼ばれたのか、一体何をしなければならぬのか。

どうして俺なのか。

「レンにはレンのやるべきことがあると言うのに・・巻き込んでしまつて本当にすまないと思う。」

あんまりにもデイが辛そうに言うものだから俺は慌てて両手を顔の前で振った。

「別にデイを責めてるんじゃないって。だって俺を呼んだのはデイじゃないだろう？」

俺を呼んだのはデイじゃない、それは分かりきったことだった。

俺を呼び出したのは多分あの時あの塔に居た奴だ。けどデイは俺の言葉に何か深く考え込んでしまう。

難しい顔をして何かを考えているデイに俺はおいそれとは話しかけられず、続く沈黙の中デイを見つめた。

どんどんと部屋が暗くなっていく中で、それでも輝きを失わないデイの銀髪に何故か心の奥が揺さぶられた。とても綺麗な色だと思う。今まで生きてきた中で、地毛でこんな綺麗な髪の色をした人に会ったことはなくて。

初めて見た色だからこんなに心が揺さぶられてしまふんだろうと思っていた。そつと手を伸ばしてデイの髪に触れようとしたのは無意識だった。

でもどこかで、俺はこの色を知っているとも思った。デイとは今日初めて会ったんだからそんなことあるはずがないのに、それでも俺はこの色を知っていると感じてしまっていた。

手を伸ばしデイの髪に触れかけた時、パッとデイが顔を上げてしまい俺は慌ててその手をテーブルの上に置いた。

「大分暗くなってきたな、すっかり話に夢中になってしまった・・・」

「うん、俺も楽しかった。」

訳が分からない状況に身を置いているというのに少しの不安もないのは、デイと一緒にいるからなんだろうと思う。

「とりあえず今日はもう休んでくれ、長々とすまなかったな。」

「いいって。俺も楽しかった。」

デイと話せて良かった。おかげでちゃんと知ることが出来たから。デイはいい人だ。彼について来たのは間違いじゃない。

会話に一区切りをつけたデイは俺を風呂へと案内してくれた。部屋風呂もあったみたいだからそこでも良かったんだけど、やっぱり頑として譲ってはもらえず。

案内されたそこは風呂というよりはまるで温泉かプールのように広くて、一人湯に使っていると居た堪れない気持ちになった。気持ち良かったけど。

風呂に浸かって気づいたけど、どうも自分で思っていた以上に俺は疲れていたみたいだった。気疲れっていうのかな、いきなり見知らぬ世界に放り込まれたんだからそれは当然なのかもしれない。

風呂から上がって自分の部屋に戻ると、天蓋のついた豪華なベッドにダイブしてごろりと寝っ転がりながらこれまた豪華な天井を見やる。

「一体これからどうなるんだろ・・・」

本当なら今日は数学の小テストがあって、放課後は甲子園に向けて部活に励んで、帰り道で友達とマックで軽く腹ごしらえをして、帰ったらお笑い番組を見て。そんな普通の日常を送っているはずだったのに。いきなりロープレの世界に放り込まれたってどうしたらいいのかきつと誰にも分からないだろうな。

放り込まれてしまった俺自身にも分からないのに。

目を閉じると暗闇にジャモンの姿が浮かび上がって見えた。

今頃どうしてるかな、あいつ。

うとうとしながらそんなことを考えつつも、そのまま俺は転がり落ちるように眠りについてしまった。

第一章：第四話

翌朝、部屋をノックされる音で目を覚ました。

「・・・起きるから、もうちょっと待ってよ。母さん・・・」
ごろりと体を横にする。

「レン？」

物音一つしなかったのにいきなりすぐ側で声が聞こえた。いつの間に部屋に入ってきたんだ？てか、母さんの声じゃない。

何で男の声がするんだ？俺はぼんやりと目を開き声のした方に顔を向けた。

「レン、朝だ。朝食を持ってきたから食べるといい。」

ベッドの脇に立っていたのは男だった。朝日に照らされて銀髪が輝いて見える。

「・・・誰・・・？」

知っているような知らないような。寝ぼけた頭では物を考えられない。

すると男は苦笑を浮かべ「寝ぼけているのか？」と俺の頭をかき乱した。

俺は数度瞬きを繰り返し、再度男に視線をやった。

「・・・あ、デイ・・・」

「ようやく目が覚めたか。」

苦笑を浮かべ俺の横に立っていたのは昨日会ったばかりのデイだった。そっか、俺今異世界に来てるんだっただけ。

俺は体を起こすと大きなあくびをした。そして目を擦りながらベッドから這い出す。

「おはよー。」

「おはよう。」

デイに手を取られて石の床をぺたぺたと歩きながら窓際にあるテールブルに連れて行かれた。

そこには朝食と呼ぶには豪華すぎる料理が少し小さめのテーブルに所狭しと並べられている。

見たこともない料理の数々に俺はつい目を輝かせてしまった。

「これ、食べてもいいの？」

「レンの為に用意したものだ、存分に食べるといい。」

そそくさと席に着くと俺は「いただきます」と両手を合わせてから用意された食事に手をつけ始めた。見たこともない料理はやっぱり食べたことのない味をしていて、でもすごく美味しい。

「うまい。」

次から次に皿を空けていく俺にデイは目を丸くしていたが、しばらくするとそれは優しい笑みが変わっていた。

「デイは食べないの？」

「俺はもう済ませてあるから気にしなくていい。それにしても、朝からよく食べられるな。」

「そう？」

最後の一品を片付け、俺は「ごちそうさま」と手を合わせた。

少し辛めだったけど美味しかった。満腹になった腹をさすりながら俺は背もたれに身を預ける。

「・・・レンの、その手を合わせる仕草は何なんだ？」

いきなりデイがそんなことを口にした。手を合わせる仕草って、

「このこと？」

俺は手の平をぺたりと合わせ合掌をしながらデイを伺う。するとデイが頷く。

「不思議な仕草をするな。」

「そう？考えたことないけど。」

「何か意味があるのか？」

「あるよ。えーと、食材になってくれたものに感謝の気持ちを込めて食べる為にするんだ、って聞いている。もう半分癖みたいなものだから・・・あんまり考えてないけど。」

確か子供の頃、母さんにそんな風に言われて躡けられていた気がする

る。デイは納得したのか「なるほど」としきりに頷いていた。

「この国にはそんな習慣はないの？」

「カーミアにはないな。食材に感謝する、なんて考えたこともないが・・・気持ちのいいものだ。」

「じゃあさ、次は一緒にご飯を食べよう。それで一緒にやっただいよ。」

「・・・そうだな。」

俺、デイの笑顔って好きかもしれない。何か、格好いい人ってそれだけでも得してる気がするんだけど、デイのそれは優しさが滲み出していると思う。

俺に向かって微笑むデイに、つられて俺も笑みを浮かべた。

「それじゃあデイ、昨日の約束。どうして俺がこの世界に呼ばれたのか話を聞かせてよ。」

忘れては駄目だ。俺はここに何をしに来たのか、何をしなければいけないのか。

それをさっさと片付けて元の世界に帰って、甲子園に行かなければならないのだから。

食べ終えた食器を音を立てて重ねていきながら俺はデイに理由を説明してもらおうと話を振ると、デイは不思議そうな顔をしたまま俺を見ていた。

「どうかした？」

「いや・・・、レンは何をしているんだ？」

「何って・・・、食器を片付けようと思って。」

一体何を聞かれているのか一瞬分からず言葉が詰まってしまったが、俺は今自分がしていることを口にした。

「ああ、なるほど。だったらそのままでもいい、侍女がじき片付けに来る。」

デイの言葉に俺も「なるほど」と思った。忘れていたけどこの人は王様なんだ。庶民とは考え方が違うのだろう。きっと食器なんて片付けたことないんじゃないのかな。

「いいよ、俺が食べたんだから。自分でやらないと何か気持ち悪いんだ。それに申し訳ないし。」

この国に来てから至れり尽くせりでほとんど自分では何もしていない。何でも自分でするように躑けられてきた俺には正直、それは落ち着かないことだった。

「レンは客人だ、そんなことをさせる訳にはいかない。」

俺の手を掴んでやめさせようとするデイのその手を俺はやりわりと払った。

「だったら、客人と思わないでいいよ。自分のことは自分でやらないと気がすまないんだ。」

「しかし・・・」

「いいから。」

郷に入っては郷に従え、とは言うけれど俺には正直この現状は持て余してしまう。

デイは譲ろうとしない俺を少しの間、まじまじと見ていたがついには苦笑を浮かべた。

「レンは変わっているな。」

「そう？」

「君のような人には初めて会った。」

折れてくれたデイに俺は笑いかけ、空いた皿を側にあった台車に乗せた。これも持って行きたい所だけど、さすがにそこまではやらせてもらえないだろう。

とりあえず、目の前のテーブルを片付けられたことに俺は満足をした。

「あ、そうだ。ジャモンはご飯食べたのかな。」

「いや、まだだろう。誰もあれには近づこうとしないからな。」

デイの言葉に俺はそうだろう、と頷いた。昨日見た人たちのパンツク具合を見ていたらそれも納得出来る。

「だったらちよつとジャモンの所に行きたいんだけどいい？」

「ああ、構わない。ジャモンの餌も用意させよう、あれは一体何を

食べるんだ？」

立ち上がりかけながらデイはテーブルにあった小さなベルを鳴らせる。するとすぐに部屋の扉がノックされ、侍女が入ってくる。

俺たちに近づいて来た侍女は片付いているテーブルを見て一瞬動きを止めたが、一言も言葉を発せずに食器が乗った台車を押して部屋から出て行った。

侍女もテーブルが片付いているなんて思ってもいなかったんだろくなあ、と俺は内心笑ってしまった。

「・・・デイはジャモンが何を食べるのか知らないの？」

昨日ジャモンの部屋にしてもらった中庭に向かいながら俺はデイに訊ねた。こっちの世界の生物なんだからデイはもちろん知っていると思っていたのに。

「生憎な。レンは知っているんだろう、あれは相当君に懐いているように見えるが？」

「いや、俺昨日ここに来たばかりであいとも昨日仲良くなったんだ。」

「・・・昨日？しかし」

「俺、昔から動物には好かれる体質だからあいつもそれで俺に懐いてくれたんだと思う。」

話の内容からするに、デイもジャモンが何を食べるのか知らないようだった。

デイもまた、俺が昨日ジャモンと会ったばかりだと思ひもしなかったようで。

「・・・一日もかからずに、あれと打ち解けたのか。君は。」

哑然とした表情をしていた。俺はただ苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

「ジャモン！」

案内されたジャモンの居る中庭で俺は声を張り上げた。すぐにジャモンは茂みから姿を現し、飛ぶように俺の側にかけ寄ってくる。

「おはよう、ジャモン。夕べはちゃんと寝れたか？」

ゴロゴロと喉を鳴らすジャモンの頭に抱きつき俺は顔を埋めた。やっぱりこの毛並みは気持ちがいい。

頭を撫でながらジャモンの目を覗き込むと穏やかな色をしていた。どうやらここは居心地がいらしい。

「なあ、お前腹減ってないか？」

するとジャモンは鼻を鳴らす。昨日俺と会ってから今まで何も食べてないから減ってるとは思っていたけどどうやらそれは当たりだったみたいだ。

「お前何食べるんだ？分からないから色々用意してみたぞ。」

用意したのはデイだけど、まあこの際それは置いておこう。

さっき、侍女が持っていた台車よりも一回り大きいものに肉と葉物と果物を乗せて俺はジャモンの側に近づいた。その一つ一つをジャモンの鼻先に持っていく。

初めに肉の塊を近づけるが臭いをかいただけで顔を逸らせてしまった。パツと見肉食獣だから絶対に肉食だと思ったのに。続けて葉物と果物を近づけると、何度か臭いをかいでからジャモンは果物にかぶりついた。

「・・・へえ、お前って菜食主義なんだ。」

それも果物。見た目は熊か虎でしかないのにそれはあまりにも意外だった。デイもそれは同じ感想だったらしく、絶句して固まってしまっている。

「果物ならもっと量がいるのかな。ねえ、デイ・・・もう少し果物の量を増やしてもらってもいい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、ああ。用意させよう。」

かなり長い沈黙の後に、デイは我に返ったように中庭から出て行った。

「おい、デイが相当困惑してるぞ。お前、今まで一体どれだけ暴れて来たんだ？」

黙々と果物を食べ続けるジャモンの頭をそっと撫でると、ジャモン

は視線だけを俺に向けそしてまた果物へと意識を戻す。

「マイペースな奴だな、お前って。」

ジャモンはデイが戻ってくる前に、持ってきたすべての果物を平らげてしまった。体が大きいから食べる量は相当あるとは思っていたけど、それにしても早すぎる。

ジャモンはまだ物足りなさげな顔をしていて、俺はチラリと扉を振り返りデイが戻ってくるのを待った。程なくして戻ってきたデイは、大きな台車にいっぱい果物を乗せて俺たちの所へとやってきた。

「遅くなってすまない。」

「・・・すごい量だなあ。」

上下に二段ある台に大きなかごが乗せてあって、その中には溢れんばかりの果物が詰め込まれていた。

「体がでかいからな、一体どれだけ食べるのか分からん。」

果物を地面に撒きながらデイは興味津々にジャモンを見ていた。そんな二人を横目に俺は下段のかごに入っている果物に手を伸ばし一つを手にとった。

見た目は梨に似てるけど、色が違う。梨よりもっと濃い緑をしている。こんな果物があるんだ、と思いながら俺はそれにかぶりついた。

「あ、うまい。」

濃厚な甘味が口に広がって、想像以上の美味しさに俺はジャモンと同じくらいのスピードでそれを食べきってしまった。

「レンは本当によく食べるな。」

呆れたようにデイが俺を見てそう言った。

「へへ・・・初めて食べたけど、これすごい美味しい。」

「レンの国にはないのか？」

「似たようなのはあるけど、それはもっとさっぱりしててこれよりも水気があるんだ。」

もう一つ食べようとかごに手を伸ばすと、ジャモンがグルルと低く唸った。食べるなど威嚇をされてしまった、そんなに腹が減っていたのか。

俺は渋々と手を引っ込める。

「後でレンにも用意させよう。」

クツクツと笑いながらデイが言った。その口ぶりに一体どれだけ食べると思われているんだろうと、少し顔が熱くなってしまった。

さて、随分と話が反れてしまったけどこんな和気藹々としている場合じゃない。相変わらず黙々と食べ続けるジャモンの横に俺は腰を下ろした。デイも俺に倣って腰を落とす。

「教えてよ、俺が何をしなきゃならないのか。」

「そうだな。どこから話せばいいのか・・・」

ジャモンに触れながら、俺はデイに話を振った。

「話をする前に聞いておきたい。昨日レンは俺の知らない世界の話をしてくれたが、そこは一体どこなんだ？」

「あー・・・」

そう来たかと、俺はガリガリと頭を掻いた。

「カーミアでもイリツィアでもないと言っていたな。」

「・・・うん、その二つの国じゃないことは間違いないよ。」

「それに間違いはないんだな？」

やけに念を押してくるデイに俺はハテナ顔をしながらも頷いた。

「・・・そうか、分かった。」

ひとまず納得してくれたのか、デイはそれ以上を追及しようとはしてこなかった。

「ではこの世界の成り立ちはもちろん知らないな？」

「うん、分からない。」

「分かった。ならば、そこから説明をしよう。」

デイは姿勢を正し、話し始めた。

「この世界はある一本の世界樹によって支えられて存在している。それはこの国の最南端の場所にあるのだが、その樹は今枯れようとしている。それを知ったのは丁度今から三ヶ月前のことで、この国の占者がそう告げた。彼らがそう言うのならそれに間違いはない。世界樹は間違いなく近い未来、枯れるだろう。そうなる就非常にま

ずいことになる。」

「・・・まずいつて？」

「何故なのかは分からないが、世界樹が世界に存在していないと疫病が蔓延し大規模な飢饉になるんだ。そして大地が枯れ、この世界の民は飢えて死んでしまう。そうなる前に新しい世界樹を植える必要がある。」

「・・・そう、なんだ。」

それが俺にどう関わってくるんだろう。まったく想像がつかない。話の先が見えず首を傾げている俺にデイは聞いてきた。

「昨日、レンは風を使っただろう？」

「・・・うーん・・・」

昨日もそれを言われたけど、あれは偶然じゃないかと思うんだよな。いきなりそんな、風を操るとか出来ないだろ普通。

「この世界で風を操れる人間はたった一人に限定される。この世界では風は守りの力として考えられていて、守り癒すものなんだ。」

「・・・そうなんだ。」

世の中には色々な思考があるものだ、と思う。

「風を使う者は守り癒す、そして育む者とされている。」

「・・・」

「育むとは生ける全ての物を対象としている、つまり世界樹もその対象になるんだ。」

まだ話が見えない。言っていることは分かるんだけど、それがこの先にどう繋がるのかどうにも分からなくて俺はまだ首を傾げていた。 「世界樹はこの世界にとって特別なものだ、それを育む者となるとまた特別な存在となる。」

「うん。」

「育むものが、全てを創り出すんだ。」

「・・・つくる？」

「親は子を産み育てるだろう。それと同じで、世界樹を育む者が世界樹を生み出す。」

デイの言っていることは確かにつじつまは合っていると思う。生み出す者が生み出したものを守るのは、まあ当然のことと言えばそうだ。ってことはつまり？

「風を使うものは全てを守り育み、世界を守るべき世界樹をも育む者。それが出来るのはこの世界にはたった一人であり、君は昨日その風を使った。つまりレン、君が世界樹を守り育む者となる。そして世界樹を育める者だけが世界樹を生み出せる。・・・俺の言いたいことが分かるか？」

「・・・えーと・・・」

理解は出来るけど、あまりにも想像からかけ離れていてうまく飲み込めない。

「君が新しい世界樹を生み出し育てるということになるんだ。」

「・・・俺が、世界樹を生む？」

「そうだ。それが君の役目であり役割となる。」

俺の頭は真っ白になってしまった。言われたことは理解している、けど心が追いつかない。だってそうだろう？俺は人間で、男で、この世界には昨日やって来たばかりで。

この世界のことだった今デイに聞いて知ったくらいなのに、どうしてそんな重大な存在になってしまっているんだ。

世界樹を生み出す存在だなんて理解しろと言われたって出来やしない。いや、ロープレの世界ではいきなりあなたが勇者ですとかって言われるのはよくあるし・・・。

「レン、大丈夫か？」

呆然としてしまっている俺の手をデイは取り、きつく握り締めた。その手の強さに俺はハッと我に帰った。

「デイ・・・俺・・・」

「レン、落ち着いてくれ。混乱するのは分かるが、落ち着くんのだ。」

「俺・・・、なんで？俺はこの世界とは全く関係がないのに・・・」

「分かっている、レン。とにかく今は落ち着いて欲しい。」

混乱を極めている俺をデイは静かになだめ続けた。側に居たジャモンも心配そうに俺の体に尻尾を巻きつけてくる。

少しずつ、少しずつ俺は心に平静を取り戻そうと努めた。納得出来るかどうかは別として、自分の身に起こるであろうことをとにかく理解しようとする。

「・・・デイ、・・・ごめん・・・」

「いいんだ。もう、大丈夫か？」

「・・・うん、何とか。理解は、したよ。」

体に巻きついていているジャモンの尻尾を両手で掴み、俺は深く息を繰り返した。

「まさかこんなことだとは思ってもなかった。」

何とか笑みを浮かべて見せると、デイは痛ましげに顔を歪めた。

「デイ？」

次の瞬間には俺はデイに強く抱きしめられていた。

「すまない。関係のないレンに、こんな役目を押し付けてしまうなんて。」

「・・・デイ・・・」

「巻き込んでしまって、本当にすまない。」

俺は恐る恐るデイの背中に手を回し、しがみついた。デイが心からそう思ってくれているのだと分かって、少し嬉しかった。

大丈夫、俺は一人じゃない。これを成し遂げないと帰れないっていうのなら、やってやろうじゃないか。

「大丈夫、俺ががんばるよ。」

「・・・レン・・・」

デイはそっと俺から離れると間近から顔を覗きこんできた。男前な顔が目の前にあって、妙にドキドキしてしまう。こうして近くで改めて見ると、デイは本当に整った顔をしている。銀髪が整った顔にじっくりとはまっついていて、男前度をかなりアップさせていると思う。デイってきつともてるんだろいうなあ、などと考えてしまっていた。

「レン、もう一度聞く。」

「・・・？」

「君が居た世界のことだ。」

「・・・俺の？」

違う場所と言ったんだからもう知っているはずなのに、どうしてここまでデイがこだわるのかが俺には分からなかった。

「この世界とは秩序も理も全く違う世界から君は来た、違うか？」
さっきとは違う、確信を持った言い方だった。

「・・・それは・・・」

「昨日、君の着ていた服装は見たことのないものだった。もしかしたら次元すら違う場所なんじゃないのか？」

「・・・デイ・・・」

「君は全くこの世界のことを知らなかった、そして俺も君の世界の話に心底驚いた。まるで聞いた事のない在り方だったからだ。もしレンが違う次元から来たのだとすると説明がつくんだ。」

「説明がつくって、一体何に・・・」

俺がこの世界でない場所から来たのがそれほど重要なのか、デイの念の入れように少しおかしいと俺は感じてしまう。

「俺が違う場所から来たんだって、昨日話したんだからデイは分かっているだろ。どうしてそんなにこだわるんだよ。」

それがどれだけ重要なことなのか俺には分からなかった。

・・・違う、分かううとしていなかった。

デイの苦しげな表情に不安ばかりが増して行ってしまう。

「世界樹の種を生み出す者はこの世界ではない場所から召喚されると決まっている。」

「・・・召喚？」

「理由は分からない、どうしてそんなことになっているのか。だが、今ある世界樹もそうやって生み出されたものなんだ。そして本来、君を召喚すべき役目は俺にあった。」

デイは険しい顔をして俺と目を合わせようとしなかった。握り締められた拳が少し震えているのは気のせいじゃない。

「デイが？」

「しかし俺が召喚をする前に、君はここへ来た。俺以外の誰かが君を召喚したんだ。」

俺は思い返した、昨日ここへやって来た時のことを。

俺はどこか塔のような場所の最上階らしい部屋の中央に、気がついて居た。あの時、部屋の床には何か模様が描かれていなかっただろうか。そしてその場にいた連中は確か「成功した」と言っていなかったか？

「あ……色？」

「ここへ来た時、君はどこに居た？……誰が側に居た？」

本当ならデイが俺を召喚するはずだったのに、別の誰かがそれをした。呼んでしまえば同じことじゃないのか？どうしてそこにデイはこだわるんだろう。何か問題でもあるんだろうか。

「俺、気がついたらあの森の近くにある高い塔のてっぺんに居たんだ。そこには何人かの人が居て、俺を取り囲むようにしてた。そいつら、俺を見るなり「成功した」とか言ってて、すごい気味の悪い連中で怖くなって……それで俺は逃げ出したんだ。」

「あの森に塔だと？」

「……うん、でも……そいつらから逃げようとしたら俺、塔から落っこちて。でも落ちた時にあの塔は側にはなかったんだ。デイ、あそこに塔ってあるだろ？」

俺の言葉にデイは難しい顔をして黙り込んでしまった。急に不安に襲われ、俺はデイの手をギュッと握り締めた。

「レン、そいつらはどんな色をしていた？」

「……色？」

「髪や目の色だ。見えなかったか？」

昨日もデイは色と言っていた。そういう意味だったんだと、俺は記憶を思い返した。

「……ほとんどの連中はフードを深く被ってたからどんな色だったかは分からない、けど……。部屋の一番奥に居た奴は何も被っ

てなくて・・・、確か、赤い髪をしてたと思う。顔に大きな傷のあ
る・・・」

「顔に傷のある赤い髪の男だったんだな？」

「・・・うん、確か・・・」

デイは拳を固く握り締め、厳しい表情を浮かべていた。もしかして、
その男に心当たりがあるのか。

「デイ・・・？」

けれどそれきりデイは口を開かず、俺がいくら呼びかけても返事を
してはくれなかった。そして「急用を思い出した。」と言い残すと、
無言のままジャモンの居る中庭から一人出て行ってしまった。

デイの後姿を見ながら俺は直感で今のデイの言葉は嘘だと思った。
デイが最後に見せた表情は固く強張っていて、俺に視線を向けよう
ともしなかったから。

俺は寝そべっているジャモンの腹に体を預け、天井を仰いだ。

放し飼いにされているのか、綺麗な色の鳥が数羽その空間に羽ばた
いていた。

デイは、俺を召喚するのは本来は自分だと言っていた。でもそれを
何故か他の人間がした、たったそれだけのことに何か問題でもある
のか。結局俺は自分がこの世界で何をすべきかは聞いたけど、どう
すべきなのかは聞けずじまいに終わってしまった。

どうすればいいんだろう。世界樹の種を生むって、一体どうしたら
男の俺がそんなものをつくり出せるんだろう。

「ジャモン・・・、お前何か知らないか？」

問いかけにしかしジャモンは何も返さずただ喉を鳴らすだけだった。
まあ、当然なんだけどさ。

「・・・まだ分からないことだらけだ。」

ここへ来てまだ二日目。でももう随分とここに居る気がする。
早く帰りたい、帰っていつもと同じ日常を送りたい。

全てを元に戻して野球のことだけ考えていたい。薄情だと言われて
も、今まで全く関係のなかったことに巻き込まれて冷静に協力出来

る人間なんてそうそういない。

デイの助けになりたいとは思ってるけど。

「あー、野球がしたいなあ。」

一体戻れるのはいつになるんだろう。帰るためにするべきことは分かっているけど、あまりにも現実味がなさすぎてどう行動に移せばいいのか分からない。

唯一知っているデイも、様子がおかしいし。

出るのはため息ばかりだった。

第一章：第五話

「ねえ、その鳥ってどうやったら乗れる？」

結局、あれからどれだけ待ってみてもデイは中庭には戻って来なかった。戻ってくるとは言わなかったから文句は言えないけど、でも話はまだ途中だったはずだ。それなのに戻ってこなかったのには俺も少々腹が立ってしまう。

太陽が高く昇りきるまでは待った。でもデイは帰ってこなかったの
で、俺は勝手に行動することに決めた。

とりあえず、まず世界樹が見てみたいと思った。

生むどうこうじゃなくて、この世界を守っているものを一見みたい。
俺は誰の許可も得ずに城を歩き回り、ようやく昨日ここまでやってきた大きな鳥のいる納屋にたどり着いた。

その納屋の前には一人の男が居て、鳥たちに餌を用意しているよう
だった。

デイはこの国の最南端に世界樹があると言っていた。たぶん、歩いて
いける距離じゃないはず。それに場所も分からないし。

でもこの鳥なら知ってるんじゃないかと思ったのだ。

俺の問いに男は訝しげに眉根を寄せた。

「デイ様の許可が出ていれば乗れる。」

見知らぬ俺に話しかけられながらも男は特に俺の身分を確認してこ
うとはしなかった。きっと俺の存在が城中に広まっているからな
のだろう。

男はそんなそっけない返事を返してきた。

「・・・デイの許可ならもらってあるよ。俺、世界樹のある所に行
きたいんだ。」

とっさに嘘をついて様子を伺う。もし書面とかが必要だとか言われ
たらアウトだけど。

「・・・一番右に居る奴を使え。そいつは世界樹の場所を知って

いる。」

心配は杞憂に終わったことに息をつき、俺は納屋に入った。男が言っていた一番右に居る鳥の前で足を止めると、何事かといった風に鳥が俺に向かって顔を伸ばしてきた。

「世界樹のどこまで連れて行って欲しいんだけど、いいか？」

顔を撫でると鳥は一度鋭い鳴き声を上げ俺の体に顔を擦り付けてきた。連れて行ってくれるみたいだ。

「こいつ、いいって言ってくれたからさ。この納屋から出してくれないか？」

俺は振り返り男に声をかけた。すると男は無言のまま納屋に入ってきて、さっさと手綱を取り付ける。鳥たちを仕切っている小さな扉を開けて鳥が出入り出来るようにするとまた無言のまま納屋から出ていってしまった。自分がやるのはここまでだと言うことか。

「・・・別にいいけど。」

俺は結び付けられた手綱を手に取り、鳥を引き連れ納屋を出た。

鳥は心得ているのか納屋から出ると一度大きく羽ばたいてから地面に腹ばいになった。

それでもまだ高いそこに、俺は何とか一人でよじ登ると手綱を手巻きつけた。昨日、デイが鳥を操っている所を見た。興味津々で操り方も少し聞いたから何とかなるはずとタカを括り、俺は鳥の体を足で挟み込みそして高く手綱を打ち鳴らす。鳥がけたたましい鳴き声を上げて一気に空へと羽ばたく。

振り落とされないようにしっかりと体にしがみつきながら俺は前を見据えた。勝手な行動をしてしまったとデイは怒るだろうけど、何かをしてないと落ち着かない。

「怒られるのは帰ってからでもいいや。」

世界樹はカーミアの最南端にあるとデイは言っていた。そこがどれくらい遠い場所なのか、すぐに行って帰ってこられるのか分からないけど。

のんびり待ってるだけなんて性分じゃないんだよな、俺って。

ギュツと手綱を強く握り締めなおし、鳥が導くままに俺は世界樹へと向かった。

鳥は長い距離を飛んだ。ようやく鳥の扱いにも慣れた頃、俺は周りの景色に目を配れるようになっていた。遥か下には緑の森が途方もなく広く広がっている。

絶景ではあるけど、歩いていっていったら何日かかるか分かったものじゃなかったかもしれない。

鳥の存在を知っていて本当に良かった。

やがて、前方にそびえ立つ樹が見えてきた。まだ距離はあるのに、ここからでも相当の大きさの樹だと容易に知れた。間違いなくあれが世界樹だ。

「・・・大きい、な・・・」

風を切る音にかき消されてしまう小さな呟きは誰の耳にも届かない。徐々に近づいてくる世界樹に俺は目を奪われていた。

屋久島の千年杉なんて目じゃないくらいの大ささだった。本当にこれが樹なのだろうか。でか過ぎて本当に樹なのかよく分からなくなってきた。しょう。

鳥が少しずつ高度を下げ始める。それに合わせて俺も体を低く構えた。近づくにつれ、その大きさに俺は息を呑んだ。これが枯れかけている樹だなんて聞かされていても信じられないくらいに力強く大地に根付いている。

鳥が地面に着地するために樹の周りを緩やかに旋回し、そして大地へと降り立った。

動きが完全に止まってから、飛び降りるようにして俺は地面に立つと世界樹に駆け寄る。

声も出ない。悠然と構える世界樹は、風に吹かれて葉が心地良い音を立てていた。そっとその幹に手を押し当てると脈動が聞こえてくるようだった。

「これが・・・世界樹・・・」

俺は額を幹につけ、目を閉じた。

この樹が枯れかけているなんてどうして信じられるだろう。こんなにも圧倒的な存在感を放っているのに。力強さに揺らぎなんて全く感じないのに。

本当なのだろうか、にわかには信じられなかった。その姿を目の当たりにした今は更にそう思えた。微かに押し当てた額に樹の鼓動が聞こえてきそうなのに。

俺は額を離すと樹を見上げる。

この樹も人が生み出したものだと言っていた。俺がこの樹に変わるものを生み出すなんて、現実味が更に遠のいて行ってしまう。
「・・・なあ。」

風に吹かれ世界樹の葉がさわさわと音を立てるのを遠くに聞いていた。何だろう、世界樹が喜んでるように感じるのは俺の気のせいなのか？

「お前、本当に枯れるのか？」

世界樹に言葉を向ける。

生きているものはいつか命を終える、それは当然のことだから仕方がない。だけどこの樹が命を終える瞬間が近づいているなんて俺には信じられなかった。

デイは時間がないと言っていたけど、あとどれくらいの時間が残されているのだろう。

「枯れるさ、そう神託が下りたからな。」

聞き覚えのない声が背後から聞こえてきて、俺は反射的に振り返った。

「あの高さから落ちて、よく生きていた。」

「あっ、お前っ！」

あの塔に居た赤い髪の男がそこに立っていた。物音なんてしなかったのに、一体いつの間に。

「世界樹の種を持つ者が、召喚された途端死んだらお笑い種だ。」

男は一步一步、俺に近づいてくる。男が近づくとつれ、嫌な感覚に襲われる。

あの時と同じだった。

「お前が俺をここに召喚したのか？」

体の奥底から湧き上がる震えと嫌悪を懸命に堪えながら俺は問うた。

「そうだ。」

男はニヤニヤと笑いながらそこで足を止める。

「あの野郎にでも聞いたのか？」

「？」

「お前を搔っ攫っていったあの生意気な国王殿のことだ。」

「デイを知ってるのか？」

「当然だろう。本来ならお前を召喚するのはあいつだったはずだ、その様子ならもうそのことは聞いているんだろう？」

俺は返事をせず、ただ男を睨みつける。

声も、話し方も、態度も。この男の何もかもが感情を逆撫でしてくる。

「・・・どうやら世界樹の母上殿はご機嫌斜めのようなな。」

「・・・何？」

「あんまり興奮すると、腹の子供に悪いぜ？」

俺は男を睨みつけたまま返事をしなかった。ただ言っている言葉が意味不明でほんの少し眉根を寄せてしまった。すると男は呆れたように、「聞いてないのか。」と言った。

「あのスカした国王殿からお前は何の説明も受けてないのか？」

「・・・何がだよ。」

「お前がここに呼ばれた理由だ。」

「それは聞いた。」

すると男は唇の端を吊り上げ、嫌な笑みを浮かべた。

「それは、か。つまりそれ以外は何も聞いてないってことだな。」

凶星を指されて俺は一瞬身じろいしてしまう。その反応を見て男は確信を持ったのか、一気に俺との距離を詰めると俺の両手を強引に掴み世界樹に押し付けた。

あまりの力の強さに身動きが一切取れなくなってしまいが、俺はそ

れでも男を睨みつける。

「まあ、説明を聞いていようがいまいが・・・資格も権利も俺にある。あいつは何も出来ずに指を咥えて見ていればいい。」

「何の話だよ。」

男の発する嫌な空気が触れた場所から体に入ってくるようで気持ちが悪い。

「てか、お前誰だ。」

男は今までで一番嫌な笑みを浮かべた。

「お前の生む世界樹の父親になる男だ。」

「・・・は？」

「お前は世界樹を生む者だ、だが一人では生めない。・・・人間だってガキを作る時には男と女が協力しなきゃ出来ねえだろ？」

「それとこれと何の関係があるんだよ。」

手を振りほどこうと腕に力を入れてみるがびくもしない。男は俺を押さえつけたままゆっくりと顔を近づけてきた。

「世界樹を生む為には、お前は俺と契りを結ばないと駄目だからさ。」

「

契り？この男と？

「・・・契りって・・・」

想像したくなくて頭がストップしてしまう。考えたくもないような想像が頭の奥にじわじわと広がっていく。

「・・・詳しい話は戻ってからだ。あいつが来ちまうからな。」

男は俺の手を解放すると更に強い力で俺の体を抱きこんだ。逃げ出そうと暴れるけどあまりの力の差にもがくことも出来ないまま、

「ちよっただけ、お寝んねしてな。」

首に軽い衝撃を受けるのと同時に俺の意識はブラックアウトしてしまった。

目を覚ましたのは肌寒さのせいだった。

「・・・ここは・・・？」

体を起こし辺りを見回す。見覚えのある部屋のような気がする。

「俺、どうしたんだっけ・・・」

記憶を手探りながらどうしてこんな場所にいるのか思い出そうとした。確か一人で世界樹のあるところまで行ったんだ、そこで俺は。

「・・・あ・・・」

思い出した。そこで俺はあいつに会ったんだ、俺をこの世界に呼び出したとかいうあの赤毛の男。ってことはここは初めに居たあの場所なのか？

よくよく見てみると俺は部屋の中央にある石造りの台座のような場所の上にいた。おまけに何故か服を着ていない。寒くて目が覚めたのはこのせいだったのか。

「ようやくお目覚めか？」

いきなり声と共に背後から腕を引かれ体勢を崩した俺は後ろに倒れこむ。しかし台座から落ちなかったのは、後ろにいた男の胸に抱きとめられたからだ。

いつの間にこんなに近くに來ていたのか、さっきまでは居なかったのに。

「震えてんじゃねーか。怖いのか？」

「寒いからに決まってんだろ！」

男の手を振り払い、俺は男が居るのとは反対側の台座の向こうに飛び降りた。

「服、返せよ！」

「きやんきやんとよく吼える奴だな。」

「誰がそうさせてるんだよ！」

「俺だな。」

クツと笑うと男はどこからか一枚のシーツを取り出し俺に放り投げた。俺はそれを体に巻きつけ、台座を挟み男から一步離れる。

「ここからは逃げるのは無理だぞ？」

「・・・最初は俺に逃げられただろ・・・今度だって。」

「だから、もう逃げられないようにしてやったんだ。もしかしてこ

ここがお前を呼んだ場所と同じだとも思っているのか？」

「……同じじゃないか。」

どう見てもここは最初に目が覚めたあの場所だ。こんなにも見覚えがあるのに。

「まあ、部屋の造りは同じにしてあるからそう思うかもしれないがな。」

「……？」

「お前はもうここからは逃げられない。前回みたいに逃げられないよう出入り口は作っていないからな。」

そう言われて俺は部屋を見渡した。石造りの壁に、確かに扉らしいものは一切なかった。そして窓もない。

完全な密室だった。

「お前は逃がさない、世界樹の種を生ませるまではな。」

蛇のように絡み付いてくるその言葉に、俺はゾッと身を震わせた。駄目だ、この男の存在が気持ち悪くて仕方がない。

「……生むって、どうやるんだよ。」

そうすればここから出られるってんなら、すぐにでも生んでやりたい気分だった。

しかし男はニヤニヤと俺を見ているだけで何も言おうとはしない。

「説明するんじゃないのかよ。」

「説明するよりは実践した方が早いと思ってな。」

「……説明、しろよ！俺しか生めないんだったら、俺には知る権利があるはずだろ。」

「ガキのくせにでかい口を叩く奴だ。」

「勝手に人を呼びつけたくせに！」

怒りが頂点に達し、俺は叫んだ。歯を食いしばり、それでも嫌な笑みを浮かべ続ける男を限界まで睨みつける。

しかし男はそんな俺を気にも留めていないのか、ふいに俺に向かって歩み寄ってきた。

「来るなよ！」

「そう興奮するな。」

「誰がそうさせてると思って・・・」

俺は男に捕まらないようにと後ずさりながら距離を縮めないようにするが、そんな状態で逃げ切れるはずもない。

大またで近づいてくる男にあつという間に腕を取られてしまう。

「そんなに聞きたけりゃ教えてやるよ。」

掴まれた腕が痛み悲鳴を上げる。振り払おうとしても叶わず、俺は引きずられるようにして台座の側まで戻されそこに押し倒された。

「お前はこれから俺と契りを結ぶ。そして世界樹の種を生むんだ。」

「だからっ、契りって何なんだよ!」

「体を繋げるってことだ。」

体を繋げる？俺は男の発した言葉に思わず固まってしまった。

「お前はこれから俺に抱かれ種を生む、嫌でもそうしなきゃお前は元の世界には戻れないからな。」

「・・・・・・な・・・」

「残念だったな。あのやろうがお前を召喚してさえいれば、もう少し手柔らかに扱ってもらえたんだろうが。」

頭が真っ白になってしまつて男の言葉が頭にまで届かない。けれど男は構わず続けた。

「召喚者とでなければ世界樹の種は生み出してはならない、これは決まりごとなんだよ。」

まったく冷静さを取り戻さない頭でも、少しずつその言葉の意味が入ってくる。

本当ならデイが召還者だった。

俺が元の世界に戻る為には契りを結び種を生まないと帰れない。俺を召喚したのは目の前のこの男で。

この男に抱かれて種を生まないと俺は帰れない。

「・・・・・・やだ・・・」

デイの言葉を思い出した。

『君を待ち受けている困難は、恐らく君の想像を遥かに超えるものだ。』

その通りだ。こんなこと、俺には受け止められない。こんな男とそんなことは出来ない。

「いやだ。」

体をわななかせながらも俺は言った。

「お前となんて、死んでもごめんだ。」

だからデイはあんなにも召喚者が誰なのかを気にしていたんだ。俺を呼んだのはデイではなくてこの男なのだと。

嫌悪感に肌が粟立った。

こんな奴とそんなことをするくらいだったら戻れないでいる方が遥かにましだ。

「嫌だろうがお前が種を生まなければこの世界は終わる。お前も帰れない。」

「俺にそんなこと、関係ない。・・・帰れなくてもいい。」

はつきりと示した拒絶の返答は強烈なびんだだった。破裂音と共に俺の頬に激痛が走る。

それは一度では終わらず、何度も頬を張られ意識が朦朧とし始めると男は手を止めた。

「お前の意志など俺には関係ないってことを覚えておけ。」

手で頭を台座に押さえつけられ耳元で囁かれた。

「今すぐ済ませちまいたいが、招かれざる客が来たようだ。お前はここで大人しくしている。」

男は吐き捨てると、部屋から消えていった。

第一章：第六話

俺は呆然と横たわったまま動けなかった。痛みに思考がまとまらない。それ以上に悔しくて。泣きたくなんてないのに涙が溢れてくる。あんな男にろくに抵抗も出来なくて、俺の意志なんてここにはどこにもない。

「………デイ………」

どうしてデイじゃなかったんだ。俺を呼び出したのが、どうしてデイじゃないんだ。そしたらこんな思いしなかったのに。どうして俺を呼んでくれなかったの、デイ。

あの男の説明は恐らく本当なのだろう、だったら俺はあの男に抱かれて世界樹の種を生まなければ元の世界には戻れない。

でもそれをするのは本来はデイだったのだ。
どうして。

「デイ………」

泣きながら俺は体を起こした。辺りを見回しても出入り口の一切はない。ここからは出られない。

デイのところに帰ったかった。こんな勝手をしなければ良かったと、死ぬほど後悔をするがもう遅い。

「………何で、俺こんなにバカなんだよ………」

きつと今頃俺が居ないことにデイは気がついているはずだ。でも、探してくれるだろうか。

急に不安に襲われた。

デイにとって、俺は世界樹の種を生む人間でしかない。新たな世界樹が生まれれば俺のことなんてどうでもいいと思うんじゃないだろうか。

それだけでなくも出会って間もないこんな俺に、そこまで肩入れをしてくれるかどうか分からない。

世界樹さえ生まれるのなら、つくるのは誰だっていいんじゃないの

かな。

「いやだ、いやだ・・・」

デイが必ず助けに来てくれる確証なんて無い、それに俺がどこにいるのかさえ知らないはずだ。俺は自分の今の状況に絶望した。

デイの願いは世界樹の種を誕生させ、新しい世界樹をつくり上げること。それなら今の俺の状況はデイにとって何の問題もないじゃないか。

助けに来てくれる理由すらないことに気づいた俺は震える腕で顔を覆った。

「・・・デイ・・・」

けれどどうにも不安に耐え切れず俺は壁に走り寄ると石の壁を拳で何度も叩いた。

「デイ！」

何度も場所を変え、俺は必死で壁を叩き続ける。けれどびくともしないそれに、俺はやがてその場に崩れ落ちてしまう。

唇を噛み締めても涙が止まらない。

「デイ・・・助けて・・・」

冷たい石畳の床にうずくまり、俺は声を殺して泣いた。

ふわり、と。

風が吹いたのは俺が泣き崩れてしばらくしてからのことだった。

冷たい石畳に座り込んで冷え切っている俺に、どこからか温かい風が舞い込み俺を包むようにしている。

泣き濡れた顔を上げると俺の周りにだけ違う空気が漂っているような気がした。まるで俺を慰めるかのようにその風はいつまでも俺の周りにまとわり付いている。

「・・・慰めてくれるのか？」

空を掴む仕草をすると、嬉しそうに風が俺の頬を撫でてきた。

そしてその風はある一点へと強く吹く。顔をそちらへ向けるとそこ

には一枚の大きな鏡が壁に立てかけるようにして置いてあった。さっきまであんな鏡はなかったのに、いつの間に。

俺は立ち上がりその鏡の前に行くとその前にストンと腰を落とした。映るのは自分の姿だけ。

張られた頬が真っ赤に腫上がっているのを見て、俺は無意識にそこに手で触れていた。

唇も切れている。血の味がしていたから切れているとは思ってたけど、ここまで酷いとは思ってなかった。

シートで口元を拭いコツンと額を鏡に押し当てた。冷たさが心地良かった。

「・・・デイ・・・」

名前を呼んでも、届くはずも無い。探してくれているかも分からないのにそれでも俺はデイを呼んだ。

「俺はここにいるから、助けて・・・デイ。」

不安と希望が胸の中でごちゃ混ぜになりながら、俺はそれでもデイを呼んだ。

「・・・?」

うつすらを開いた時、鏡が真っ先に目に飛び込んできた。それは当然なのだからいい、けど写っているものが。

俺は鏡から顔を離しそこに映っているものをはっきりと目にした。

「・・・デイ!」

どうしてそんなものが写っているかなんて分からない。だけど、そこにはデイの姿が映し出されていて、どこかは分からない場所だけどあの男と一緒にいた。

激しい口調で何かをまくしたてているデイに男はニヤニヤと嫌な笑みを浮かべ相手にしてないようだった。

「デイ!デイ!俺はここにいる!・・・デイ!」

鏡を激しく叩いてもデイは気づかない。

「デイ!気がついて!俺はここにいる!」

探しに来てくれたんだ。デイは俺を探してくれていた。行き先なん

て言わなかったのに、どうして分かったのかここまで探しに来てくれたんだ。

俺の胸に歓喜と焦りが湧き上がってくる。

「デイ、こっち向いて！・・・頼むから、こっち向け！」

鏡が割れるんじゃないかと言うくらいに俺は激しく叩いた。けどデイは俺に気がつかない。

「デイ！！！」

バンバンと何度も鏡を叩き、俺はデイにここにいると知らせようとした。でも伝わらない、音じゃ駄目なんだ。確かにデイと男の会話もこっちは聞こえてこない。

だけど他に方法なんて無い。

「デイ！俺はここにいるよ！気がついてよ！」

一際高く叫び、俺は鏡を叩いた。すると、鏡の中でデイがこちらを振り向いたのだ。

それはただ単に偶然だった。俺の声が届いた訳ではなく振り返ったデイは俺に気づいた素振りを見せず、苦々しい表情を浮かべその場を去ろうと・・・追いやられようとしていた。

「デイ！」

帰ってしまう。デイが帰ってしまう。俺はここに居るのに、近くに居るのに。

「デイ、・・・デイ！帰らないで！俺はここに居るよ！」

激しく鏡を叩きながら俺は恐怖した。このまま俺に気づかずにデイが帰ってしまったら、もう二度と会えないかもしれない。

「デイ！」

鏡の前を通り過ぎようとしているデイに俺は絶叫して名前を呼んだ。泣き叫び、デイを呼ぶその声が届いたのか。無造作にデイがこちらを向いた。

「・・・デイ！」

鏡をバンバンと叩いて俺は必死にデイを呼んだ。初めはよく分からなかったのかもしれない、デイは訝しげに俺の方を見ていたが次の

瞬間には表情が変わった。

俺の方へ走り寄ってきてくれたのだ。俺の名前を呼んでいるのか、唇が何度も同じ言葉を言っていた。

「デイ・・・デイ・・・」

泣きじゃくりながら俺は鏡に縋りつくと、すぐ目の前にデイの姿が映っていた。

「デイ・・・助けて・・・俺はここに居る・・・お願い、ここから出して。」

鏡の向こうでデイが俺に触れようと手を伸ばしてくるけど、駄目だった。俺は手の平を鏡に押し当てているデイのそれに自分の手を重ね合わせた。

真っ直ぐにデイの顔を見ると、必死に何かを俺に言っている。唇を読もうとしても、早口で何を言っているのか分からない。

「・・・デイ、ごめんなさい・・・デイ・・・」

デイは勝手な行動をした俺を探してくれて、見つけてくれた。

「デイ・・・デイ・・・」

姿は見えても言葉は通じないと気づいたのか、デイはふと俺の前で手を振った。

「・・・?」

鏡の中のデイを見ると、自分の唇の端に指を当てている。

ゆっくりと唇が言葉を紡いだ。

『すぐ』

『迎えに』

『行くから』

『待っている』

俺が読み取れるようにゆっくりと、一言一言を区切るようにデイはそう言った。

デイが迎えに来てくれる、助けに。

俺は何度もその言葉に頷き涙でぐしゃぐしゃになった顔で、俺は笑って見せた。

「・・・デイ・・・」

待っていると云おうとしたその時、鏡に亀裂が入りほぼ同時に砕け落ちてしまう。

「何で・・・」

せつかくデイと話せたのに、見つけてもらえたのにどうして。

考えるまでもなかった。あいつも鏡の向こうに映っていた、だったら鏡を砕いたのはきっとあいつだ。あれ以上俺とデイを話させない為に。

「・・・くそつたれ!」

俺は鏡の残骸を殴りつけ、そして立ち上がった。

デイは俺を見つけてくれた。だったらきつともうすぐ助けに来てくれる。ウジウジと泣いている暇なんてない。

涙に濡れた頬をシートで拭い俺は逃げられる場所はないかと部屋中の壁を調べ始めた。

あの男はこの部屋を出入りしている。だったら必ずどこかに出入り口があるはず。壁を押したり引いたりしながら俺は必死に探した。

しかし壁を一周してもそれらしいものは見つけれない。早くしないとあいつが戻ってくるかもしれない、焦りを覚えながら俺は必死に出入り口を探し続けた。

「・・・何か探し物か?」

第一章：第七話

突然。ねちっこい蛇のような声が低く、冷たく部屋に響いた。

慌てて振り返るといつの間にも部屋に入ってしまったのか、男が俺のすぐ後ろに立っていた。

「・・・っ！」

「鏡を繋げるとはやってくれるじゃないか、見くびっていて悪かったな。」

逃げようとして、腕を掴まれ男の元に引きずり戻される。

「お前があんなことをしてくれたおかげで。」

「・・・いっ！」

ギリリと掴まれた箇所を握り潰そうとするかのように男は力を込め続ける。

「あいつを煙に巻くのが大変だったぞ。」

「うっ・・・あ！」

「お前が世界樹の種を生む者でなけりゃ、とっくの昔に殺してるな。」

「・・・っ、はなせっ・・・」

男の指に手をかけ引き剥がそうとしてもびくともしない。このままじゃ腕が潰される。

本能的な恐怖に俺はがむしゃらに暴れた。

「暴れるな、鬱陶しい。」

吐き捨てると男は容赦なく俺の頬を殴った。

衝撃に、俺は部屋の中央にある台座がある場所にまで吹き飛ばされてしまう。背中から床に叩きつけられ一瞬呼吸が止まりかける。咳き込んでいると近づいてくる足音が聞こえ、俺は何とか逃げようと手を床について体を起こそうとするが、頭がグラグラして思うように体が動かなかった。脳震盪を起こしているかもしれない。

「逃げようとするな。いっそ、逃げられないように手足を潰してや

ろうか。」

髪を掴まれ強引に顔を引き起こされ、目前で能面のような表情をした男が言った。

「……誰がつ、てめえなんか……」

「威勢だけはいいいじゃないか。」

「……痛っ……」

髪だけを掴まれたまま俺は台座へと引き上げられた。乱暴に転がされずぐさま男が押し掛かってくる。

「……さわんなっ！」

「触らなきゃ致せねえだろう？」

笑いながら男は俺の顎をきつく掴み、そのまま口付けてきた。

「んっ……、んうっ……！」

いきなりの行動に思考が停止してしまう。口内を這い回る舌の動きにすぐに頭は働き出すが、何をされているのか受け入れがたかった。否、受け入れられるはずが無い。

空いている手で男を全力で殴るがびくともしないし、舌を噛んでやろうとしても顎を固く留められていて動かない。

「んうっ……や、めろ……」

「止めるわけないだろ。」

さも可笑しいと言わんばかりに男が唇を離した。

「お前を抱いて俺は世界樹の種を手に入れられ……おまけにやつとあの野郎の鼻を明かしてやれるんだ、笑いが止まらない。」

「……あの野郎……？」

「今日、お前を取り戻しに来た国王殿のことだ。あいつにはいつも辛酸を舐めさせられてるからな、手始めにお前を犯して見せ付けてやるさ。」

クツクツと俺の上で笑う男に、俺は眉をひそめた。俺を犯したところでどうしてデイにそれが関係あるんだ。

俺の表情を読んだのか男はニヤリと笑った。

「あいつはなあ、昨日今日出会ったばかりの奴を助けに来るような

お優しい奴じゃないんだよ。どんな手を使ったかは知らんが、お前はあの国王殿に惚れられたらしいな。」

「・・・・・惚れ・・・・・？」

「あんな剣幕のあの野郎を見たのは今までで初めてだ。おまけに鏡でのあのやり取り、間違いないな。俺が召喚してからたったの二日であの堅物を落とすなんてどんな色目を使ったんだ？」

デイが、俺に、惚れてる？予想もしていなかった言葉に俺は完全に思考停止してしまった。

「あいつの鼻が明かせた上に、種を手に入れて俺はこの世界の王になる。全部お前のおかげだな。」

「違う！デイはそんなんじゃない、デイは無関係な俺を巻き込んでしまうお詫びに俺に良くしてくれて・・・・」

だってそう言っていた。最初に会った時にデイはそう言った、だから俺を探して助けに来てくれるんだ。何があっても守るって言ったのは、そういう意味なだけだ。

「お前がどう思おうと勝手だが、それはお前の考え違いだ。」

「考え違いなんかじゃない！デイが俺を好きになるなんてあるはずがない！」

必死に叫び俺は否定した。

しかし男は何故か俺の目を真っ直ぐに見つめてくる。さっきまでの嫌な笑みが消え、見たことのない真面目な顔をしていた。あまりの男の変貌振りに俺は言葉を失った。

「あいつはお前を心の底から愛している。」

「・・・・そんなはず、ある訳がない・・・・」

俺はうわ言のように呟いた。

「どうしてそう思う？」

「だって・・・・だって俺とデイは会ったばかりで・・・・」

「人を愛するのに時間なんて関係ないんだよ、さすがガキだな。これじゃあの野郎も報われねえな。」

呆然とするしかなかった。だってそうだろう？こいつは一体何を言

っているんだ。

デイが俺を愛しているって。そんなことあるはずがない。

「次に会った時にでも確かめてみる。」

あまりにも男が優しい眼差しで俺を見てきて、俺はこの時初めてここへ連れてこられて冷静になったのかもしれない。あることに気がついた。

この目、デイの目と似てる。

「さて、おしゃべりは終わりだ。」

男は表情を一変させると、またいやらしい笑みを浮かべた。そして俺の体に巻きつけられているシーツを一気に取り去る。

「こんなガキ相手に欲情しろってか。全く・・・」

男の悪態はまるで耳に入らなかった。

抵抗すら忘れるくらい、男に言われた言葉が俺の頭の中を支配していた。男の裸の肌が重なってきてもその熱さも感じず、されるがままに呆然としていた。

デイが、俺を？

信じる信じないじゃない、あり得ない。俺だってデイを好きだけどそんな感情じゃない。

違う。違う。

「おら、何人形になってんだ。抵抗くらいしてみせろ、つまらん。」
グイと顎を掴まれ男が呆れた顔を俺にしてみせた。

「さっきまでの威勢はどこへ行った。こんな簡単に貞操を奪われていいのかよ。」

「・・・っ・・・」

言葉が出てこない。自分が何を言いたいのかも分からない中で、一つだけ心にある。

デイが俺を探してくれていたことがどうしてこんなに嬉しいと思ってしまうているんだろう。この男が召喚者だと多分デイは知っているはずだ、それなのに男から俺を取り戻そうとしてくれている。

世界樹はこの男とでなければ生み出せないはずなのに。

どうして俺を探してくれたんだろう。

「・・・あー、分かった。分かったから泣くな！」

男は苦虫を噛み潰したような顔をして俺の上からどいた。男に言われて俺はやっと自分が泣いていることに気がついた。今までにない、優しい眼差しで男が俺を見下ろしてくる。

「何で泣く、小僧。」

男の手が髪に触れ、反射的に体を固くすると盛大に男はため息をついた。

「もう殴らんから安心しろ。・・・なんで泣いてるのか、理由を言え。」

「・・・って・・・」

「あ？」

「だって・・・」

自分ですら、どうしてこんなに悲しいのか分からないんだ。何で俺は泣いているんだろう。

本当に、どうして俺は泣いているんだ。

分からないけど涙が止まらない。

デイは強くて優しく、誠実な人だ。そんな人に好かれているのだとしたらそれはとても嬉しい。この男の言葉をすべて信じる訳じゃないけど、俺だって出会ったばかりだけどデイのことが好きだ。

だから怖い。好きになんてなりたくないのにどうして心は言うことを聞こうとしてくれないんだろう。俺はどうにもならない力に引張られるように自分の心がデイに惹きつけられているのを感じていた。

助けを求めたのはデイだけ、この世界で知っている人がデイしかないからなのかもしれないけど。側に居たいと思ったのはデイの側だけだった。

何でこんなに、心に浮かび上がってくる存在がデイだけなのか、俺には分からない。

「・・・デイに会いたい」

分からないけれど今はデイに会いたかった。

「・・・ガキには付き合いきれんな。」

俺の髪をぐしゃぐしゃとかき乱すと男はまた盛大なため息をついてみせる。

「あの野郎がどうしてお前を好きになったのか分かる気がする。」

「・・・え？」

「世界樹の種の持ち主は癒しの風を持っているとは聞いていたがここまでとはな。おまけに心まで無垢ときてる。」

更に意味不明なことを言いながらも男は俺の手を取り体を引き起こせると、どこからか一枚の布を取り出した。手渡されたそれは服だった。

「着ろ。」

訳が分からず、俺は言われたようにそれを頭からすっぽりと被った。「あいつに会わせてやろう。」

来い、と手を取られ俺は男に連れられて部屋の壁際に立たされた。突然の男の行動に俺は言われるがままだった。

男が壁に手を触れるとそこにぽっかりと穴が開き、そこから上に続く階段が現れた。

いくら探しても出入り口が見つからなかった訳だ。

そして男に手を引かれたまま階段を昇りきると、そこは塔のてっぺんだった。塔は高く、強い風が吹き荒れている。

「この塔をあいつにも見えるようにした。じき、やってくる。」

男は俺の腰に手を回し耳元で低く囁いた。見えるようにしたって、てことは今までこの塔は見えていなかったってこと？

初日に塔から落ちた時、すぐ側にあるはずの塔が見えなかったのはこういう理由だったからなのか、と俺は一人納得した。

同時に、男の心が分からなくなった。世界樹の元で男と会った時と今と全く様子が違って見える。

「どうしてなんだよ。」

「何がだ。」

「世界樹の種が欲しいんじゃないのか？」

それだけの為に男は俺をこの世界へ呼んだはずだ。なのに俺を手放すってことは、もういらなくなってことになる。

俺を連れ去っておきながらどうしてすぐに手放す真似をするのか分からなかった。

吹き荒れていた風が不意に凧いで、男の言葉がはっきりと聞き取れた。

「お前には関係のないことだ。」

ぶっさらぼうな口調に、しかし穏やかな笑みを浮かべながら男はそう言った。

腰に回された手にグッと力が入れられ「来たぞ」とある一点を見据えながら男は言い、俺は同じ方向に視線をやった。

遠くから何かが空を飛んでやってくる。近づいてくるにつれて、それが何なのかははっきりと分かった。

怪鳥だ。俺が世界樹の元へ行った時乗っていたのと同じ。

その背には一人の人が乗っていた。

「……デイ！」

ついさっき鏡越しに会ったはずなのに、懐かしく感じるのはどうしてだろう。胸が熱い。

「レン！」

俺の姿を見止めたのかデイが叫び、鳥を塔の近くまで寄せると飛び移ってきた。危なげなく着地をすると、すぐさま腰の剣を抜き構えた。

「貴様、レンを離せ！」

「そんなに焦らなくても返してやるぜ。」

男は俺の腰に手を回したまま涼しげに言った。

「あのカーミアの国王殿がここまでこいつに執着するとは、面白いもんを見せてもらった。」

「黙れ！」

剣を構えたままデイはじりじりとにじり寄ってくる。俺は次第に鼓

動が高まってくるのを感じていた。緊迫した空気に吞まれてしまう。

「貴様、レンに変な真似をしてないだろうな！」

「変な真似？ 変な真似ってのはどういうことなのか説明してもらってもいいか？」

茶化した物言いに、デイが更に表情を険しくする。

「・・・まあ、多少殴りはしたが、変な真似はしてないぜ。こいつは、いい子だったからな。」

そう言うとも男は腰に回した手に力を入れ俺を引き寄せた。

「・・・え？」

まさかそんなことをされるとは思ってもいなかった俺は男にされるがままに顎に手をかけられ上を向く。すぐさま視界いっぱい男の顔が広がったかと思うと唇に温もりが触れた。

デイの目の前で男に口付けられている。その事実気づくのの数秒かかった。気づいて、慌ててもがくがやはり男の拘束はびくともしなくて。

「貴様！」

デイの怒声が鋭く響くと男は俺から口を離し、乱暴に俺の髪を掴んで上向かせる。

「この通り、こいつはもう俺にとっては用済みだ。だからお前にくれてやるよ。」

乱暴な態度と言葉とは裏腹に、見上げる視界に入ってくる男の目は落ち着いていたし、

掴まれている髪は全く痛くなかった。

この男の、言っていることとやっていることがかみ合っていない。

一体何を考えているんだ？

「お前は、レンと言うのか。そう言えば名前も聞いてなかったな。」俺にしか聞こえない小さな声で男は言った。向けられる眼差しがさつきと同じく、優しい。

こいつ、何かおかしい。

急に不安に襲われた。嫌な奴だと思っていた、実際こいつは嫌な奴

なんだと思う。だけど今はちょっと違う気がする。

「・・・何考えてんだ？」

急激な男の変貌ぶりに俺は不安になりついそんなことを聞いていた。けれど男は茶化するような笑みを浮かべるだけで。

「ここは相手の名前を聞く所だろうが。」

「・・・名前って。」

そう言えば今の今まで俺はこの男の名前を知らない。

「俺はライカ・ルイーサだ。覚えとけ、ガキ。」

「・・・ライカ。」

男の名前を呼ぶと、凪いでいた風が再び吹き荒れ始めた。

第一章：第八話

ライカは意地悪くニヤリと笑って見せると俺をデイに向かって突き飛ばした。短い悲鳴をあげ、俺はつんのめりながらデイの胸に抱きとめられた。

「レン、大丈夫か？」

「デイ・・・」

灰色の瞳が俺を心配そうに見つめてくる。

「デイ、ごめん。俺、勝手なことして・・・」

俯きずつと言いたかったことを口にする、デイは優しく俺の頭を撫でてくれた。

「無事だったんだから、もういい。」

「でも・・・」

「もう無茶はしないでくれ、行きたい所があるのなら俺が連れて行ってやる。」

デイの言葉に胸がズキッと痛んだ。

素直に喜べない自分がいた。理由なんて分かりきっているのに、デイにこんな風に言葉にされるとどうして胸が痛むのかを思い知らされてしまう。

デイ、俺は帰るんだよ？・・・その一言が言えなかった。

帰りたくないと思い始めている、間違いなくこれも俺自身の心だった。

「さて、いちやいちやるのもそこまでにしてもらおうか。」

ライカがどこに持っていたのか、長剣を手を持ち構えていた。デイを覆っている空気ががらりと一変する。

「レン、下がっている。」

聞いたことのない低い声に逆らえず、俺は数歩後退した。

睨み合う二人はピクリとも動かず、間合いを詰めていた。強風が吹いた瞬間、それが合図となって二人が動いた。激しく剣を打ち合う

音が狭い塔の屋上に響き渡る。

俺は手に汗を握りながら二人を見ていた。

二人が戦う理由が分からない。だって俺はライカには何もされてないのに。

そうだ、あいつは世界樹の種をあんなに欲しがっていたのに、結局俺に何もして来なかった。だから俺は種を生まない。けどデイはきつと俺がライカに乱暴されたと思っているはずだ。ライカが俺を「用済み」だと言ったから。

あいつはどうしてあんなことを言ったんだろう。自分で分かっているはずなのに。

この戦いは無意味だ。何の意味もないものだ。なのにどうして二人は戦うんだ？

「デイ・・・ライカも・・・何で戦うんだよ・・・」

二人の戦いを見守りながら俺は呟いた。言葉は届かず、二人は戦いを止めない。

「デイ！やめてよ！戦わなくていいから、もう帰ろう！」

強風が吹き荒れる中、叫んだ俺の声が届いたのかデイの動きが鈍る。そこへ容赦なくライカの剣が襲い掛かった。すんでの所でそれを回避したデイは、しかし体勢を崩し地面に倒れてしまう。

「デイ！」

切りかかるライカの剣をギリギリの所で避けたデイは再び立ち上がると、ライカに視線を戻した。剣を構え直し、鋭い眼差しでライカを射抜く。

臆さず、ライカはそれを受け流していた。

無事だったデイに俺は安堵の息を吐きながらも、握り締めた両手が汗でびっしょり濡れているのを感じていた。そのまま唇を噛み締め、俺は二人を見守っていたけれど。

でも、胸の奥に小さな焰があった。

怒りに似た感情が、俺の胸に湧き上がり徐々に大きくなっていく。ライカは俺に何もしなかった。けれどあえて挑発することでデイと

戦っている。ライカの目的は一体何なんだ。

戦う必要なんてどこにもないのにあえてそうする意味が分からなかった。

「やめろよ、もうっ・・・」

風がどんどんと勢いを増して、立っているのも困難なくらいにまで吹き荒れる。それでも戦いをやめない二人に俺の中の小さな焰がどんどんと大きくなっていった。

二人を止めたい。止めたいのに止められない、やめて欲しいのにやめてくれない。

相反する心と現実には押しつぶされそうになって、俺は。

「二人とも、もうやめろよ!」

堪らず絶叫した。胸にあった焰が体中に広がりそれは俺の声と共に解き放たれる。

吹き荒れている風が音に、その音が振動となって俺たちを襲った。

二人の動きが止まり、視線が俺に向くのとほぼ同時に。

俺たちを支えていた塔が音を立てて一気に崩れ落ちる。足元を無くし高い塔から真っ逆さまに俺たちは落ちていった。

「レン!」

デイが俺を呼んだ。落ちながら俺に手を伸ばしてくるデイのその手を何とか掴もうと俺は必死に手を伸ばした。あと少し、もう少し。何度も近づいては指先がすれ違いそれを何度か繰り返した後、やっと俺の手はデイの指に引っかかった。

「レンッ!」

グイと引き寄せられ俺はデイの腕の中に抱きしめられた。

「デイ、・・・デイ・・・」

「大丈夫だ、絶対を守ってみせる。」

崩れ落ちていく塔の瓦礫に巻き込まれながら俺たちは地上へと落ちていった。

俺は必死にデイの腕にしがみつきながら、祈った。すべての風に、俺たちを守って欲しいと。

落下時間はたぶん数秒。これはたったそれだけの出来事でしかなかった。

俺はデイに抱きしめられたまま地面に叩きつけられた。でもそれは少し強めに背中を打ったくらいなもので、また風が守ってくれたのだと分かった。

「・・・デイ・・・」

俺とほぼ同時に落ちたデイも、呻き声を発してはいたけれど意識はあるようだった。怪我もどこもしていない。

俺は震える手でデイの腕を撫で大きく息を吐いた。

生きていて、良かった。デイが無事で本当に良かった。

俺は地面に仰向けに寝ていて、デイは俺に覆いかぶさるようにしていた。だから見えたのは俺だけだった。迫り来る、瓦礫の山が俺たちの上に降ってくるのを見たのは。

まだ終わっていないのだとその時気づいた。

「・・・デイツ！」

緊迫を伝える俺の悲鳴にデイはハッと頭上を仰ぎ、何が起ころうとしているのかを瞬時に察した。逃げる時間はない、デイはきつとそう判断したのだろう。

「デイ!？」

襲いくる瓦礫の山から俺を守るように、自分の体の全てを使って俺を覆った。

「デイ!何を!」

しかしものがく間もなく、大量の瓦礫が俺たちの上に降ってきた。激しい音と衝撃が俺たちを襲い、そして砂埃が舞う。

俺はデイの腕にしがみ付いて必死に堪えた。しばらくすると瓦礫は全て落ちきったのか、音はなくなった。うつすらと目を開くと大量の砂埃が宙を舞っていてまともに目を開けていられない。

「・・・デイ?」

それでも俺は体を起こした。俺の上にいたデイは瓦礫をまともに受けているはずだ、のんびりと寝ている場合じゃなかった。

「デイ、大丈夫・・・？」

埃にむせながら俺は何とか目を開け、側にいるはずのデイを探した。真っ先に見えたのはデイの腕。それを確認して俺はホッと息をついた。

けれど。

次の瞬間、その光景に心臓が止まるかと思った。

「・・・デイ・・・？」

側にあったのはデイの腕。しかしそれは体に繋がっていないかったのだ。デイの腕だけが、俺の側にただ、あった。

「・・・デ・・・」

デイの腕の付け根は激しく損傷していた。瓦礫に切り離されたのだ。俺はデイの腕を手に取り、胸に抱いた。鼓動がどんどん速くなって、息が苦しくなってくる。辺りを見回してみてもデイの姿は見当たらない。

「・・・デイ、・・・デイ・・・」

俺はデイの腕を抱いたまま這いずりながらデイの体を搜した。

「デイ・・・、どこ？」

頭が回らないまま、俺は必死にデイを探した。捜して、捜しまわって。

ようやく少し離れた瓦礫の下に、見覚えのある色を見つけた。

銀の、デイの髪の色。

「・・・デ・・・イ・・・」

日の光に反射して輝くそれは、少しも動かない。

俺は混乱したまま頭を振った。胸が苦しくて息が出来ない。

目が熱くなって視界がぼやけてくる。

「・・・はっ・・・は、・・・はあっ・・・」

必死に銀色に手を伸ばした。まともに息が出来なくなってきて俺はデイの腕を抱きかかえたまま、胸を掻き毟った。

デイ。デイ。デイ。嫌だ、起きて。

しない。死なない。死なない。

「デイ！」

絶叫が宙に吸い込まれるように消えていく。頭がどんどん真っ白になっていく。何も考えられなかった。

体を渦巻く熱だけが、自分が存在している唯一の証に思えた。

そしてその熱さに限界を感じた瞬間。

プツン、と。体の中で何かが切れる音がした。

体に熱が渦巻き、その熱さに耐え切れず俺は絶叫した。

「うああああーっ！」

凄まじい突風が吹きつけがたと瓦礫を揺らした。そしてその風は更に強さを増し、デイの上に乗っていた瓦礫をふわりと浮かばせた。他にも地面に転がっている全ての瓦礫が宙に浮きそして弾かれるようにして、一斉に八方へと飛び散った。

「・・・デイ、・・・デイ」

無我夢中で俺はデイの腕を抱えたまま、現れたデイの体に近づいた。ピクリとも動かないデイの体の欠けた場所に腕を置く。

「デイ、目を覚まして・・・」

デイの左肩の付け根からは鮮血が溢れていて、このままだと間違いなくデイは死んでしまうと思った。

血を止めないと、デイが死んじゃう。

「・・・なお、・・・治さないと・・・」

俺はデイの腕を体に押し付け必死に祈った。俺に治せる力があるのなら、今その全てを使い切ってもいい。デイが助かるのなら俺が死んだっていいから。

「デイが助かるのなら・・・、何だってするから・・・」

俺の願いに呼応するかのように押し当てた手の平にジワリと熱が集まりだす。

体の中に何か別のものが意思を持って蠢いている。もう何だって構わない。デイを助けてくれるのなら、もう何だって。

「お願いだから、お願いだからデイを治して。・・・治したいんだ。」

顔に血の気はなく、デイは死んでいるように見えた。それが怖くて俺はデイの肩に両手を当てたまま顔をデイの胸に押し付けた。ほんの僅かだったけれど、鼓動が脈打つ音が確かに聞こえる。

「デイ……デイ、死なないで……」

俺の周りに優しい風が集まってきたのはその時だった。あの時、鏡へと俺を導いてくれたのと同じ風が今、俺の周りに集まってきて優しい風でデイと俺を包んでくれている。

「お願いだ、この人を……助けたいんだ……」

すると風は助けるよ、と言うように俺の手の平に力をくれた。

「デイ……死なないで、生きて。」

少しずつ、少しずつ。デイの腕が繋がりはじめののを視界の隅に捉えながら俺はデイの顔を見つめ続けた。

デイの腕が修復されていくのと同時に凄まじい疲労が俺の体に蓄積していく。額から汗が流れ落ちて、デイの傷口を押さえている手ががくがくと震えだす。

まるで自分の命を削っているかのような錯覚を俺は覚えた。

だけどそれが何だっていうんだ。デイが助かるのならそんなものいくらだって使ってやる。

歯を食いしばり俺は自分の体力が続くまでずっと祈り続けた。そして完全に腕がつくと何度もそこに触れた。

本当についているかを確かめた。デイの腕は離れていたとは思えないくらい、綺麗にくっついていていた。

「デイ……」

顔に血の気が戻り、穏やかに眠っているデイを見て、俺は込み上げるものが抑えられなかった。

ぼろぼろと涙を零し、何度もデイの頬を指でなぞる。

そのまま、限界まで体力と気力を使い果たした俺はデイの体に倒れこんだ。頬に確かな温もりを感じながら消えていく意識の中で思った。

伝えたいことがあるんだ、デイ。
どうしてもデイに伝えなきゃならないことがあるんだ。
だから、ちゃんと目を覚まして。

第一章：第九話

ぼんやりと目を開くとまず初めに目に入っただのはデイの姿だった。俺の手を掴み、祈るように自分の額に押し当て俯いている。

「・・・デイ・・・？」

声をかけるとがばりとデイが顔を上げた。

「レン！」

「デイ・・・、もう大丈夫？」

デイに掴まれている手に少し力を込めると、その何倍もの力で握り締め返された。

こんな泣き出しそうな顔のデイは初めて見た。

「それはこっちが言いたい。レン、気分は悪くないか？痛いところは？」

「・・・ないよ。」

笑って答えるとデイは心底安堵した表情を浮かべ、俺に笑いかけた。

「もう三日も目を覚まさなかったんだ。」

「俺が？」

「そうだ。どれだけ心配したか・・・」

デイは俺の髪に手を入れると優しく何度も梳いてくる。心地良さに目を瞑ると、手がするりと頬に移動してきた。

「俺を治してくれたからなんだろう？」

「・・・デイ、覚えてるんだ。」

「いや、聞いた。」

苦々しい顔は、きっとライカから聞いたからなのだろう。

「そう言えば、ライカは？無事だった？」

「・・・ああ。」

途端、もっと機嫌が悪くなる。こうして見るとデイって結構子供っぽいところがあるな。

「そっか、それなら良かった。」

俺の言葉を聞いて更に機嫌の悪さに拍車がかかってしまったけど、俺はそれを無視して続けた。

「・・・ジャモンは元気にしてる？」

「ああ、レンに会えなくて機嫌が悪いんだ。体調が良くなったら会ってやるといい。」

「・・・ん、そうする。」

頬に触れていたデイの手が額にかかった髪を撫で上げ、そしてまた頬を撫でる。気持ちが良くて俺はうつとりと目を閉じた。するとまた眠気が襲ってくる。

「レン、眠るのか？」

「・・・ん、ちょっと・・・眠たい・・・」

「そうか、じゃあ・・・寝るんだ。おやすみ。」

優しいデイの声が更に俺を眠りに誘う。

「・・・デイ・・・ねえ、お願い・・・」

「何だ？」

うとうとしながら俺は布団の上でデイの手を捜した。すぐにデイが俺の手を握り締めてくれる。自分も緩くその手を握り締めると、

「・・・キスして。」

半分眠りながら言った俺の言葉に、デイが一瞬言葉を詰まらせたが分かった。でも少しの間をあけてから、優しく唇に温もりをくれる。それが瞼にも落ちてくるのを感じながら俺はまたゆっくりと眠りに落ちていった。

そして翌日。目が覚めるとやはり側にはデイがいた。

「デイ、おはよう。」

目の前の光景が今までと驚くほどに違っていた。どうしてこんな風に世界が目映るのか不思議で仕方がない。どう違うのかって聞かれたら説明には困るんだけどさ。

「おはよう、レン。起きられるか？」

握り締められている手を少し引かれ俺は頷きながら体を起こした。そのままベッドから立ち上がろうとして、失敗した。足に力が入ら

ないのだ。

「ああ、それはそうだろう。レンは四日も寝ていたから少し筋肉が落ちているんだろうな。」

心得たようにデイはそう言ったかと思うと、俺の膝と脇に腕を通すとそのまま俺を抱き上げる。恥ずかしさに暴れても相手にしてもらえず、俺は朝食の用意してあるテーブルまでお姫様抱っこで運ばれてしまった。

「あれ？テーブルが少し大きくなってる気がするんだけど？」

「ああ、俺の分もあるからな。」

「デイも一緒に食べるの？」

俺を椅子に座らせ、デイも正面の椅子に腰を下ろした。向かいのテーブルにもナイフとフォークが置いてある。

「次は一緒に食べると約束をしただろう？」

言われて、ここで朝食を食べた日のことを思い出した。俺は思わず笑ってしまったけど、デイは至って本気のように。ぎこちなく手の平を合わせて合掌をしていた。俺も一緒に合掌をし声を合わせて「いただきます」と言った。

この日の朝食は前の時よりもずっと美味しかった。

食事が終わり、また二人で「ごちそうさま」と手を合わせた後、デイと目が合って俺は声を上げて笑ってしまった。

それから二人でジャモンのいる中庭に行った。久々に姿を見せるとジャモンは飛び掛るように俺にじゃれ付いてきて、何度も顔を舐めてくる。気が済むまでそうさせてから、俺はしばらくの間ジャモンと中庭で遊びまくった。

どれくらい遊んだのか。四日ぶりの運動に俺は呆気なく音を上げてしまい、デイからドクターストップを受けてしまい、あっという間に部屋へと連れ戻されてしまった。

「もっと遊びたかったのにな。」

「それはもっと元気になってからにすればいいだろう。」

「……………ん、それが出来るのなら……………そうするんだけど。」

そう出来ないからもつと遊びたかった。俺の言葉にデイは何かを感じ取ったのか、眉を顰めて俺を見てきた。

「デイ、お願いがあるんだけど。」

ベッドに腰を下ろす俺の横にデイは座って、俺の手を取った。俺はデイの目を真っ直ぐに見て、言った。

「俺を抱いてよ。」

「・・・レン・・・」

「俺が世界樹の種を生まないと、この世界は大変なことになるんだろ？」

「それは、そうだが・・・しかし俺は召喚者ではないんだ。」

デイの言いたいことはすぐに分かった。召喚者でなければ契っても世界樹の種は生まれれないと言いたいのだろう。

「それなら大丈夫だよ。ライカから、聞いてるんだ。」

ライカの名を聞き、デイは顰めていた眉を更に吊り上げた。

俺が最後にライカから渡された服のポケットに手紙が入っていて、そこに「召喚に使った血はあの野郎のものを使った」から「真の召喚者はあの野郎だ」と書かれていた。

「俺の召喚者は、デイなんだ。」

「・・・そんな、馬鹿な・・・」

それを伝えるとデイは明らかに絶句していた。まさかライカがそんなことをするとは思ってもいなかったみたいだった。

一体この二人はどれだけ仲が悪いんだろう。

「デイは、俺を抱ける？」

まさか自分が男に向かってこんなことを言う日が来るとは思ってもみなかった。だけど、今は平気だ。だって相手はデイだから。

デイは返事を握り締めた手の強さで返ってきてくれた。俺は微笑みデイの肩に顔を埋めた。

「良かった、出来ないって言われたらどうしようかと思ってた。」
「・・・レン・・・」

デイの声が辛そうに俺の名を呼ぶ。

「一つだけ、約束してよ。」

「・・・約束・・・？」

「絶対に、好きだとか・・・愛してるとか、言わないでくれる？」顔をデイの肩に埋めたのは恥ずかしいからじゃない。悔しいのだ。

「・・・分かった、約束しよう。」

デイは優しく俺を抱きしめ、ベッドに押し倒した。あらわになった俺の顔を見て、デイは悲しそうに顔を歪めた。

「・・・レン・・・泣かないでくれ。」

「お願いだから、絶対に・・・言わないで・・・」

「分かっている。レン・・・」

大きな手の平で瞼を覆われて、暗闇の中俺はデイの口付けを受けた。俺は元居た世界に戻る。それは自分の意思なのだからそれから逃げるわけにはいかないのだ。俺自身が帰りたいと、帰らなければならぬと思うっているからこの選択を間違っているとは思わない。

だから、可能な限りこの場所に何の心残りも残しては駄目なんだと、何も残したら駄目だと分かっているのに、どうして俺はこんなにも心が揺れ動いているんだろう。

自分の世界に戻りたいと願う心。

デイとずっと一緒に居たいと願う心。

相反する気持ちが俺の中でせめぎあっていた。

どうしてこんなにもデイに対する強い想いが俺の中にあるのかが分からない。一体いつの間に俺はこんなにデイを想ってしまったのか。

ライカが「人を好きになるのに時間は関係ない」と言っていたけれど、それは当たっている。俺は、デイが好きだ。愛だの恋だのといった感情でデイのことが好きだ。

でも俺は帰らなきゃならないから、この気持ちを告げては駄目なのだ。同時に、デイにそれを告げられても駄目だ。言われたらきつと俺は戻れなくなってしまうはずだから。

それが悔しくてしょうがなかった。

俺はとっくの昔にデイに恋をしていて、こんなに人を好きになったのは生まれて初めてのことで、望めばいくらでも手に入るものなのに。馬鹿としか言いようがない、自分の意思でそれを選ばないなんて。

「レン・・・」

口付けの合間にデイの低い声が耳朶をくすぐる。

「こんな事を聞くのは卑怯だと分かっているが・・・」

俺を閉じ込めて放したくないと言わんばかりにデイは俺の頭を自分の胸に抱きこみ、俺の額に自分のそれを押し当ててくる。

「・・・レンは・・・元の世界に戻らなければ、いけないか？」

「・・・デイ・・・」

「俺の側で生きて行っってはくれないか・・・？」

デイの言葉は激しく俺の心を揺さぶった。デイがそれを望んでくれているのが、嬉しくてたまらなかった。

俺は殺しきれない嗚咽を上げながらデイの首に必死にしがみつく。

「・・・デイと一緒に、居たいよ・・・でも、出来ない。」

「・・・レン。」

約束をしているんだ、自分の世界に居る家族に。

他人が聞けばどうしてそれを比べるんだときっと呆れてしまうくらいに小さな約束だけど、俺はどうしてもそれを守りたかった。

「・・・約束、を・・・守りたいんだ。」

甲子園に家族を・・・兄さんを連れて行きたいから。ずっと、ずっと前から。子供の頃に決めた自分の内での約束事だった。

俺が野球をやり始めたのは一番上の兄さんの影響だった。物凄く野球の上手い人で、甲子園には絶対に行けると周りの誰もが信じて疑っていなかったけど、惜敗に喫し兄さんは結局一度も甲子園には行けず。ならばと目指したプロの世界も大学在籍中に事故に遭い大怪我を負った兄さんは、その怪我が元で目標にしていたプロへの道も絶たれてしまった。

兄さんが悔しがったり悲しんだりする姿は一度も目にはしなかつ

たけど、それが自分自身の出来事だったなら俺はきつと耐えられなかった。兄さんのように笑ってなんかいられない。だから、弱音も泣き言も何も言わなかった兄さんの叶えられなかった夢を俺は叶えたかった。

兄さんの為にとかじゃない、ただ俺がそうしたいと思っただけのこと。

俺が勝手に決めただけではあったけれど、今までずっと毎日飽きる間もなく野球を続けてきたのはその為だけなのだ。今投げ出せば絶対に後悔するのは目に見えていた。

「すごく・・・小さなことかもしれないけど、でも俺は・・・投げ出したくない。」

ここでの役目を終えて自分の世界に戻れば俺は夢を追える。その代わりもう二度とデイには会えない、召喚された者が再度この世界にやって来たことはないと言っていたからそれは確かなのだろう。

両方は選べない。どちらかたった一つしか選び取ることは出来ない。

「俺は・・・この世界には、残れないよ・・・デイ・・・」

デイの肩越しに見上げた部屋の天井は暗闇に包まれて何も見えない。

こんなにデイを好きなのに、側に居たいと思っているのにそれを選ばない自分は何て馬鹿なんだろう。誰も知らない自分の中の約束を守る為だけに、芽生えた気持ちを・・・恋しく思う人を遠ざけるだけなんて。

俺は自分の意思ではない所で俺はデイに惹かれた。それはデイも同じだったんじゃないだろうか。出会えば強烈に惹かれあう、運命付けられた出会いに逆らえないように。

顔を合わせたその瞬間から互いを想い合ってしまうようになっていたのだ、俺達は。

「そうだな・・・レンにはレンの、生きていく場所がある。」

「・・・デイ・・・ごめん」

「俺が無茶を言っているんだ・・・レンが謝る必要なんてどこにもない・・・」

いくつもこめかみを伝って落ちる涙に唇を寄せるとデイは舌先でそつとそれを拭い去ると、また額を押し当ててくる。目深に覗き込んでくる灰色の瞳が俺を捉えて放さない。

「ならば・・・頼む、レン。どうか忘れないでくれ、レンにとってはこの世界の出来事など些細なものでしかないかもしれないが・・・」

「・・・がう・・・」

「レン？」

「些細なんかじゃない・・・全然、些細なことじゃない・・・些細なことならこんなに苦しまない、悩んだりしない。」

「全然些細なんかじゃない！・・・そんな風に言うな！」

自分でも呆れるくらいの駄々のこねようだけど、デイにそんな風に思われたくなくて俺は子供みたいに叫んだ。突然の俺の激昂にデイは短く息を止めたけれど、すぐに「すまなかった」と触れるだけの口付けをしてきた。

「俺と同じように・・・レンも想ってくれていると、考えてもいいのか？」

明確な言葉ではなく、デイはそんな風に訊ねてきた。

強い意志を湛えている灰色の瞳が微かに不安に揺れ動いていて、こんな強い人でも言葉を欲しがると俺は胸が苦しくなる。

「・・・っ、・・・おんなじだよ・・・」

好きだと言いたかった。

好きだと言って欲しかった。

でも、口にしないと決めたのは俺だしデイも身勝手な俺の言葉を守ってくれているから、それだけではどうしても口には出来ない。

「ああ・・・、それだけでもう・・・十分だ。」

ふわりと、デイの表情が柔らかく。

こんな破顔したデイなんて初めて見た。あんまり愛しげに見てくる眼差しが俺を包み込み、体の中にじんわりと温かいものが生まれた。

好きだよデイ。好きだよ・・・好き。

言葉に出来ないから俺は心の中で何度もデイに想いを告げた。

第一章：第十話

デイの首に回していた腕を解かれ、手の平を合わせるようにしながらシーツに腕を縫いとめられる。しっかりと手を繋ぎ、全身でデイの重みを感じながら俺達はもう何度も繰り返した口付けを、飽きなく交わした。

ゆっくりとデイに服を剥ぎ取られ、少しずつ位置を下げてくる口付けに思わず首をすくめると指先でデイが素肌を撫で上げた。くすぐったくて身を振るとまた肌に口付けが落とされる。胸に埋められたデイの頭を繋いでいた手を解いて、両腕で抱きかかえて銀髪に指を入れる。

「……あっ！」

胸の突起にカリッと歯が立てられて、体に電気が走った。くすぐったい中に変な感覚があってそれがむずがゆい。

「……あ、デイ……」

愛しい。愛おしい。

好きな人と体を重ねるのは気持ちを満たすんじゃなくて、気持ちをもっと深めることなんだ。そうじゃないのなら胸に溢れて止まらない気持ちの説明がつかない。

「レン……レン……」

名前を呼ばれるとまた俺の目尻から涙が落ちた。

デイの肌の温もりと、次第に帯びてくる汗に俺は少しずつ翻弄されていく。

「デイ……デイ……っ」

うわ言のように何度もデイの名前を呼んだ。その度にデイは体のどこかしらに口付けを落とし、慰めるように俺に触れてきた。片膝に手をかけられ大きく開かれる。

「レン……」

「……あっ……うあ、あ！」

緩やかに高められ俺の中心は首をもたげていた。デイの手がそこに触れたかと思うと次には温かなものに覆われ、初めての感覚に体が震える。一体何をされているのか分からなくて必死に下肢に視線を投げる。

「・・・デイツ・・・い、や・・・」

デイの口に自分のソレが含まれているのを目の当たりにした俺は半ばパニックになりかける。知識ではもちろん知っていることだったけれど実際に自分がされていると羞恥心が何より勝った。

「いやだっ・・・デイ、汚いっ!」

デイの髪を掴んで引き剥がそうすると一気に強く吸われ、背筋に走る快感に勝手に体が背をしならせる。

「・・・ううっ・・・」

舐られ強く吸われながら口内の粘膜で上下に擦られると、耐性なんてあるはずのない俺はあっという間に熱を解放してしまった。

余韻に体が痙攣を繰り返す。きつく閉じていた目を開いてデイを見ると顔を上げたデイと目が合った。

「レン、大丈夫か?」

呼吸が荒いせいでまともな返事が出来ず、俺は小さく頷くだけだった。他に比べようがないけど、多分デイは物凄く丁寧で優しくしてくれているんだと思う。

女の子みたいに扱われて・・・死ぬほど恥ずかしい。

「もしかして・・・レンは初めてなのか?」

そんな真顔でそんなこと聞くなよ、もう!

「・・・バカッ!初めてに決まってるだろ!」

まさかこんなことを言われる羽目になるなんて思ってもみなかった。どうせデイは経験なんて山ほどしてきたからこんなに上手いんだろうけど、生憎キスだってしたこともないのだ、俺は。

それなのにデイは俺の返事を聞くと何故か目を輝かせたのだ。

「それは本当か?」

「――ッ!」

「本当に俺が初めてなのか？」

初めてだって言ったのにしつこく聞いてくるデイを俺は殴ってやりたかった。実際殴ろうかと拳も固めた。でも、羞恥に顔を真っ赤に染める俺を見てデイは本当に嬉しそうに。

何でこんなに、と思うくらいに。子供のように無邪気な笑みを浮かべるから。

「それなら・・・こんなに嬉しいことはないな。」

笑ってそう言うから、俺はデイを殴り損ねてしまった。

「・・・そんなに嬉しいの？」

あまりに嬉しそうに笑いながら俺の腹に顔を埋め唇を落としてくるデイに、俺は思わずそう聞いてしまった。初めてとかそうじゃないとか、そんなに重要なのかな。

「レンの中の、一番深い場所に俺を刻み込めるだろう？」

言っている言葉の意味はあまり良く分からなかった。首を傾げる俺にデイは「レンはそのままできてくれ」とだけ言って笑った。

そのままデイに下肢を広げられ、自分ですらまともに触れない最奥にデイの指が掠めるように触れた。ギクリと体を強張らせてもデイの動きは止まらず、指先がグツと奥に押し込められる。

「・・・っ！」

思わず息を詰めてその感覚をやり過ぎそうとした。体内に異物が入り込む感触なんて知らない、男同士がどうやって体を繋げるのかも知らない。

「・・・デイツ・・・やっ・・・」

急に怖くなってしまった俺はシーツの上を這って逃れようとしてしまう。その体をデイが押さえつけ動きを止められた俺は、今更ながらに自分がこれからしようとしている行為の意味を知った。

「デイ・・・まって・・・まっ・・・」

「大丈夫だ、レン。」

前に指を絡められゆるくしごかれると意図せず体から力が抜けていく。その度に孔に少しずつ指が埋まってくる。嫌悪感も痛みもな

いけれど、ただ圧迫感だけが俺の意識下にあった。

「うっ・・・あ、あ・・・」

「レン、息をするんだ。」

押し広げられている太ももに唇を落とされ、たったそれだけにまた体が勝手に息を止めてしまう。

「傷ついたりしないから大丈夫だ・・・」

痛みをなるべく与えないようにと、デイは信じられないくらいゆっくりと俺の体を開いていった。実際、痛みなんてこれっぽっちも俺は感じていなくて、あったのは羞恥心と圧迫感と、デイへの愛しさ。それとほんの少しの怖さ。

行為を直視していられなくて俺は両腕で顔を覆ってしまう。でもデイは進める手を休めず、どんどん俺の体の奥へと侵入してきていた。

ぐちゅぐちゅと濡れた音がし始めたのはしばらく経ってからのこととで、緩やかだった指の動きが次第に速まって、いつしか中で蠢く指は一本ではなくなっていた。

「・・・っ、・・・う・・・あ」

内壁を押し広げようとしているのか、ぐいぐいと何度も中を擦られその度に上ずった声が喉から迸る。

「レン、痛くないか？」

デイも掠れて上ずった声になりかけていた。声色に、デイが興奮しているのが分かって俺はそれだけで身震いをしてしまう。

痛くはない、これっぽっちも痛くなんてなかった。それどころか内壁を擦られる度、奥へ指が侵入する度にうねる快感の波に襲われるのだ。

セックス自体が初めてで、男でありながら自分は受身になっている。でも本当は、違うのに。世界樹を生み出す為にしているはずの行為に、どうして愛し合っているような気持ちが溢れて止まらないのか。

前の高ぶりを手で擦られ、後ろもデイの指で埋められて。俺はそう

されながら何度も熱を放った。同じくらい、涙が溢れて止まらなくなってしまうていた。

「あっ・・・ああっ！」

いつ終わるのかも分からない、延々と続く行為にもう何度目か分からない熱を吐き出すと、デイが孔から指を抜き去った。荒い呼吸を繰り返しながら慣れない刺激に顔を顰めていると、上体を起こし覆いかぶさってきたデイがいくつも口付けを落としてくる。

「・・・レン・・・」

「・・・デイ・・・もう・・・ん・・・ふ・・・」

喉はカラカラで掠れて声が上手く出せないでいると、啄ばむだけだった口付けが突然深くなり、貪られるように口内を舌で犯された。ぽたぽたと上から滴が落ちてきて、ふと目を開くと額にいくつも汗を浮かべながら情欲に濡れた目でデイに射抜かれた。

密着している互いの肌が汗で濡れているのが心地良くて。俺はデイの首筋にしがみついて顔を埋め、デイには決して見えない場所で。

愛してるよ、と音の無い言葉で告げた。

俺達は一度だけ強く互いの体を抱き締めあって、そしてゆっくりとデイが体を起こした。

デイは俺の足を肩にかけるとまた唇に口付けを落としてくる。

「レン・・・」

掠れた声が耳元で俺を呼ぶ。散々慣らされた後ろにデイの昂りが押し当てられ、その熱さに反射的に目を閉じる。そして一気に熱の塊が体の奥へと押し込まれた。

「・・・うああっ！」

シートに投げ出していた俺の手を自分の首へかけさせるとデイは俺の腰を抱え直し、一層動きを早めた。

「・・・あっ！・・・あ、・・・ひ・・・」

肉を打ち付けあう音が部屋にこだまする。その音を遠くに聞きながら、俺は必死にデイにしがみついた。今までがまるで嘘だったかのように激しく揺さぶられ、俺は成す術もないままに嬌声を上げる

だけ。

高められ与えられる快感に俺は身を任せながら、閉じていた目を開いた。デイの肩越しに見えるのはベッドの天蓋。その向こうには暗闇の天井。

揺さぶられ、声を上げながら俺はしがみついていたデイの背に爪を立てた。

言わなければ良かった、あんなこと。

やっぱり愛してるって、言ってもらえば良かった。だってこんなにもデイは体と心で俺に言ってくれているのに。

名前を呼ばれる度に、そう言われているような錯覚を覚えてしまう。言葉にして、伝えてもらえばこんなにもどかしい思いなんてしなかった。

俺はデイにしがみ付き、揺さぶられながら泣いた。感極まってなのか、悲しくてなのかもうどっちの涙なのか分からなかった。

「デイ・・・っ、デイ・・・ひ、あ・・・」

「レン・・・」

「デイ、あ・・・あ！」

見つけ出された内の感じる場所を擦られて、俺はまた熱を放った。出しても出しても体の内に籠る熱は留まり続け、あまりの熱さに苦しくてたまらなかったけれど。

まだ足りない。まだ、このままで居たい。

デイも動きを止めることなく激しく腰をぶつけてくる。俺の放ったものがデイの腹と擦れて濡れた音を立てるのを聞きながら俺はまた高められていく。

「・・・デイ・・・も、・・・あ・・・もっと・・・」

「レン・・・くっ！」

「いやっ・・・もっと、して！」

終わって欲しくない。だって終わってしまったら「終わり」だから。デイと離れたくない。離れたくない。離れられない・・・デイを放したくない。

体を繋げて俺は、その想いが一層強くなったのを感じていた。

デイを愛してる。どうしようもなく俺はデイを愛してしまっている。言葉にして告げないまま終わってしまうのが、どうしても嫌だ。自分勝手なのは分かっていたけれど、どうしても我慢出来なくて俺は揺さぶられて、泣きながら言葉を紡ごうとした。

「デイ・・・、デイ・・・あい・・・し、・・・んっ！」

伝えたくて、思わず口にした言葉はしかしデイの唇に塞がれた。

「・・・レン、言わないでくれ・・・」

「・・・デ、イ・・・」

「頼むから・・・」

俺は揺さぶられながら、デイを見上げた。デイも目じりに涙を浮かべていた。

「・・・ひっ、・・・あ、あん・・・あっ！」

「レン・・・」

「・・・デイ・・・あっ！」

「・・・っ！」

一際強く揺さぶられ、短く息を詰めたデイが動きを止めた。最奥に熱が広がっていくのを感じながら俺は体を震わせ、その熱を受けながら俺もまた熱を放った。

白くなっていく意識の中、体の奥で何かの存在が宿ったような不思議な熱さを感じた。

一気に弛緩したデイの体がずしりと俺に押し掛かってくる。

荒い呼吸を何とか整えていると、デイが顔を上げ俺を見下ろす。眼差しが愛おしいと言っていて、俺は胸に熱い塊が込み上げてくるのを必死で堪えようとして、失敗した。

「レン・・・大丈夫か？」

「・・・っく、・・・へ・・・き・・・」

汗で張り付いた前髪を優しく撫で上げるとデイはそこに口付けてくる。

「すまない・・・途中から、加減が出来なくて・・・」

「いいから、平気・・・」

汗ばむデイの胸に俺は顔を埋めた。泣いてるところなんて見せたくない。

デイもそれ以上は何も言わず、俺を抱きしめたままずっと髪を撫で続けてくる。

このまま離れないでいられるのなら。

帰りたいのに、帰りたくないとも思ってしまったている自分が悔しかった。

どちらか一方しか選べないなんて、辛い。

俺はデイの胸に顔を埋め、止められない涙を隠そうとした。

デイも、そんな俺に言葉をかけずただ黙って俺の背を抱き締め撫で続けるだけだった。

次の日の朝。目を覚ますとデイがすぐ横に横たわり俺の髪を撫でていた。

「おはよう。」

「おはよう、レン。」

啄ばむように口付けられ、俺はデイの首に腕を回しそれを受け入れた。唇を離れた間近にデイの真っ直ぐな灰色の目があった。

銀髪が朝日に輝いてとても綺麗で。

俺はデイの頭を抱え込み、髪に、瞼に、口付けを落とした。

「レン、どうかしたのか？」

「・・・なんでもない。」

自分からするのは恥ずかしくて、パッとデイから離れると俺はシートを体に巻きつけ体を起こした。

腰と関節の節々が痛みを訴えたけれど、無視してベッドの上に座り込む。

「・・・種って、どうやって出来るんだろ？」

「それは分からないが、今の所はまだないようだ。」

「・・・女の人が産むみたいにするのか、な。」

それは少し怖い気がして顔を青ざめさせるとデイが笑った。

「それはないだろうから安心すればいい。」

「・・・そっかな。」

まだ種が無くて、少し安心した。種が生まれるまではデイと過ごせる。出来ることならそれはもう少し先のことであつて欲しいと、俺は祈った。

体を繋げて、同時に心も繋がった。セックスは体ではなくて、心を繋げる行為なのだと知った。

俺とデイの間にはそれだけの意味ではないことだったけど、やっぱり良かったと思う。デイが昨日言った通り、俺の深い場所にデイの存在は確かに刻まれたから。

第一章：第十一話

その日を入れて三日間、俺はデイと時間を過ごした。他愛の無い話をしたり、ジャモンと遊んだり、この世界を見て回ったり。初めが急すぎて出来なかったことをたくさんした。

体を繋げるのはあれきりしなかったけど、口づけは毎日飽きるほどした。

約束をしていたから「好きだ」も「愛してる」もお互いに言わないようにがんばった。

そして三日目の夜、デイが躊躇いながらこんなことを聞いてきた。

「レンが元の世界へ戻らなければならぬ理由を……聞いてもいいか？」

朝から晩まで一日中動き回ってクタクタになっていた俺は、夕食を取り風呂に入ってベッドでデイにしがみつきながらウトウトとしていた。

「デイ……？」

「……引き止めたんじゃない……知りたいだけなんだ。」
すまなさそうな顔をしながらデイは「駄目か？」と呟いた。聞かれて俺はデイに自分が帰らなければいけない理由を言っていないことに気がついた。

「駄目じゃないよ。」

心地良いまどろみに包まれながら俺は笑みを浮かべる。

「ここへ来た最初の日、俺が野球をやってるって言っただろ？」

「……ああ。」

「その野球の大会で、高校生……つまり俺みたいな学生しか参加出来ない大会があるって言ったのは覚えてる？」

「……コウシエン、と言ったか……」

「そう。」

もぞもぞとデイの腕の中で体勢を変えながら、俺はデイの胸に顔

を埋めた。

「今年が最後のチャンスなんだ。どうしても俺は・・・兄さんをそこへ連れて行きたい。」

「兄上殿を？」

「俺の兄さんも野球をやってたんだ。六歳年上で物凄く野球が上手い人だったよ、俺はいつも兄さんの背中を追っかけてたんだ。だけど兄さんは甲子園には行けなくて。」

「上手くても駄目なのか。」

「・・・野球はチーム戦だからね、一人が上手くても駄目なんだ。それに・・・運も必要だし。」

記憶はいつだって鮮明に蘇ってくる。兄さんが高校三年の地区予選の決勝の日、誰もが兄さんの高校が勝つと思っていた。だけど九回裏にエラーが出てしまって、そこから流れがおかしくなってしまった。エラーを出した選手が崩してしまったのだ、心を。

その後得点を連取され、最後の最後に逆転をされて。兄さんの高校は負けてしまった。

泣き崩れるエラーを出した選手は兄さんの一番の友達なのだと俺は知っていたから、俺は彼を責められなかった。何より、兄さんが彼を責めなかった。泣きながら彼をいつまでも抱き締めていた。

「だけど、甲子園には行けなくても兄さんにはもう一つ目標があったんだ。それが・・・プロになること。」

「レンがなりたいたと言っていた・・・？」

俺の髪を撫でていたデイがふとその手を止める。顔を上げると少し目を細めて、優しく俺を見つめていた。

「そう。元々は兄さんの夢だったんだ、プロは。」

「だが兄上殿は・・・」

兄さんは父さんの跡を継いで建築家になると俺は言ったから、デイには疑問だったのかもしれない。どうしてもその道を選ばなかったのか。

だから俺は理由を口にした。

「野球が出来なくなるような怪我をしたんだ・・・それはどうしてもう完治しないもので、諦めるしか道はなかった。」

子供の頃からの夢を奪われて、期待をしていた分周りの落胆振りは酷いものだった。一番辛いのは兄さんなのに、その夢がもう少しで手が届く所だったのに消えてしまった。

「それなのに兄さんは・・・仕方がないって・・・笑ってた。」

だから兄さんのその笑顔を見た時に俺は決めた。

「本当は諦められるようなことじゃないんだ、俺だって野球をやってるし好きだから分かる。プロになれる腕を持っている人がそう簡単に諦められる訳がないんだ。」

「・・・レン。」

誰にも言わない決意をした。兄さんへ約束をした。

「だから、叶えられなかった兄さんの夢・・・俺が全部叶えようって決めたんだ。」

独りよがりだと言われてもいい、そんなことをしてどうなるって言われても。

「兄さんはそんなこととして欲しいなんて思っていないと思う、だけど俺は自分がそうしたいと思ったから・・・自分と約束をしたんだ。」

高校に上がる時、甲子園に必ず行くと決めて入った。

二年に上がる時、プロになると心に決めた。

自分に課した約束を違えられない、融通がきかないとデイは思いうかもしれない。だけど。

「ごめん・・・デイ、俺はどうしても夢を諦めたくないんだ。」

だから俺は帰りたい。帰らないといけない、自分の世界に。

自分を愛してくれている人にとって、こんな理由が果たして通用するのか。俺だったら何て自分勝手なんだと思ってしまうかもしれない。

だって、要はデイと家族を比べて家族を選んだってことなんだから。

「それは諦めたら駄目だ、レン。」

しかし思っていたのとは反対の言葉がデイからはかけられて、俺は胸に埋めていた顔を上げた。デイは俺の髪を撫でながら、俺の理由に納得したのだろう・穏やかな光を瞳に浮かべ笑ってた。

「何より己の心に誓ったことは、例え誰が知らなくても守り貫き通さなくては駄目だ。」

「デイ・・・」

「必ずコウシエンへ・・・そして、兄上殿の果たせなかった志を全うしてやらなければ。」

責められるどころか、応援をされるなんて思ってもなかった俺は呆然としてしまった。

「もしレンが夢を捨て、この世界に残ると言っても俺は素直には喜べなかった。・・・ありがとう、レン。理由を話してくれて。」

「・・・デイ・・・」

「真っ直ぐなその心が、世界樹を生むに相応しい強い心が、レンをこの世界に導いてくれたから俺はレンに出会えた。そんなレンと・・・こうなれた事を、俺は誇りに思う。」

もうデイの名前も呼べない、俺は・・・嗚咽を漏らし泣いた。

受け入れられること、受け入れてもらえたこと、それは何よりも一番の許しなのだと思った。こんなに嬉しいことだなんて初めて知った。

受け入れられて初めて人は、心を強く持てるのだと知った。

「レン・・・」

顔を覆って泣く俺にデイは優しく声をかけると、俺の手をそっと掴みやんわりと剥ぐ。

「レン、どうして泣くんのだ？」

きつと俺の気持ちを口にしたってデイには上手く伝わらない、それにどう口にしているのかも分からない。

「・・・ごめ・・・ん・・・デイ・・・」

「謝らなくていい、レンの夢を知ることが出来て俺は今、嬉しいんだ。」

瞼に唇が触れる。頬に伝って落ちた涙の跡を追うようにデイの唇が滑って移動する。

「俺も・・・レンに約束をしよう。」

「・・・デ・・・イ？」

「必ずこの世界を・・・カーミアを守り抜き豊かな国へと導こう。世界樹と共に。」

優しい言葉、眼差し、口付け。与えられる全てが俺の中に染み込んでいく。

デイの心が、俺の中に刻み込まれていく。

「・・・お、俺も・・・デイに約束、する・・・絶対に・・・」

デイと離れ離れになる道を選んでおいて、叶えられなかったなんて笑い話にもならないから。

「絶対・・・甲子園に、行くから・・・」

もう二度と会えなくなるまで、一体どれくらい時間が残されているんだろう。

怖くてたまらなかった。

「レンを忘れることは生涯ありえない・・・だから、死ぬまでこの約束は俺を縛るものになる。」

「デイ・・・」

一生忘れないと、言ってくれた。俺だって何があっても一生忘れたりなんてしない。

きつと、互いの心以外に残せるものは何もない。世界が違おうということは、そう言うことなのだと思う。

だから心を預けて、約束で縛って。

側に居られなくても互いを失わないように。

俺達は、最初で最後の約束を交し合った。

翌朝、俺は何かと呼ばれた気がして目を覚ました。

目覚める瞬間に、夢の中で何かに話しかけられていたのはたぶん気のせいじゃない。

俺は直感で種が生まれたと分かり、布団を捲るとそこには拳よりも少し小さな種が二つ、デイと俺の間に転がっていた。

「……………」

言葉も無く、俺はその内の一つを手に取りもう一つを衣服のポケットにしまった。

生まれてくれた、…生まれてしまった。相反する気持ち俺の心を複雑にさせていた。

「…………レン……………」

寝ていたデイが、俺が起きているのに気づいたのか声をかけてくる。「どうかしたのか？」

俯いて返事をしない俺にデイは自分も起き上がると、俺の手にあるものを見て声を失った。

「この種、すぐに植えなくちゃ……駄目なのかな。」

種が生まれて終わりが一気に近づいた。ここに来て、足掻こうとしてしまう自分の心に笑ってしまいたい気持ちだった。いつかはやってくる日だった、こうなると分かっていたはずなのに。

泣きそうになりながら俺はデイを仰ぎ見る。

もしくは、世界樹が大きく成長するまで残ったり出来ないのだろうか。自分がどんな状況になったら元の世界に戻るのか分からなくて、俺はついそんなことを言ってしまった。

「レン。」

デイが強く俺の名を呼んだ。

「日が昇ったら、植えに行こう。」

「…………デイ……………」

「レンには元の世界に戻ってやらなければならないことがある。先延ばしにしては駄目だ。」

「……………うん。」

甲子園に行くのは子供の頃からの夢だった。それは自分との約束であり、昨日からはデイとの約束ともなった。違えられない大切な約束。

高校三年の今年が最後のチャンスだ、だから戻らなくては夢を叶えるチャンスすらこの手には残らない。

「そう、だよね。」

それに自分の世界でどれくらい時間が流れているのかが分からない、急がなければいけないのは当然なのに。目と鼻の先に来てしまっているデイとの別れに揺らいでしまいそうになる心を叱咤し、俺はデイに四つん這いで近づくと広い胸に顔をポフッと押し当て目を閉じた。

デイには世界樹の種が二つ生まれたことを言わなかった。心のどこかで言わなくても大丈夫だと、俺は分かっていた気がする。

それから寝られなかった俺はデイと早めの朝食を取り、日が昇りきるのを待ってから世界樹へと向かった。

我俣を言ってジャモンも連れてきてしまった、最後にちゃんとお別れをしたかったんだ。

俺とデイは鳥に乗ってなるべく低く飛んでもらい、ジャモンはそれを追いかける形で走ってきた。いつもよりも時間はかかったけど、離れがたくて俺はもっと時間がかかればいいなんて思ってしまった。

「・・・着いた。」

けれど向かっていればいつか目的地に着くのは当然で。着かなければいいと思えば思う程にすぐに着いてしまうのはどうしてだろう。デイの助けを借りながら怪鳥から降り、俺はデイと二人で世界樹を見上げた。まだ、悠然と構えている世界樹は本当に枯れるのだろうか、なんて思ってしまう。

「レン、種を。」

言われて俺はポケットから種を一つ取り出し、それをデイに手渡す。

受け取ったデイは、世界樹から少し離れた場所に埋めた。

結局最後まで俺はデイに種が二つ生まれたことを言わなかった。もし、一つで駄目だったのなら残りの一つも渡そうと思っていた。でも一つだけ渡されてデイは納得しているようだったからきつと大丈夫だ。俺はポケットの中で種を握り締めた。

ジャモンだけがもう一つの種の存在に気づいていて、俺のポケットの臭いを嗅いでこようにする。

「こら！」

デイにばれちゃうだろ！と慌ててジャモンを追い払う。

「レン？こっちへ。」

「あ、うん！」

慌ててデイの元へ走り寄ると、種を植えたらしい場所からはもう芽が出ていた。

「・・・はや・・・」

啞然としているとデイもこの速さは想像していなかったのか苦笑を浮かべていた。俺は生えている双葉の芽にそっと手を触れた。すると世界樹はものすごい勢いで成長し始める。

少し離れた場所で俺たちは世界樹の成長を見守った。世界樹は勢いよく成長を続けたが、今あるものよりも一回り小さい大きさで成長を止めた。

「・・・これだけ成長すればもう大丈夫だろう。」

「そうだね。」

ある程度までいって成長を止めた世界樹を見つめながら俺たちは、そこで言葉を途切れさせた。

日の光に照らされて緑が目にも痛い。風が吹き、大樹の葉を揺らすとさらさら心地良い音が耳をくすぐった。生まれたばかりの産声のようにも取れるその音に、何でかな。

涙が込み上げてくる。

美しいけれど見知らぬ異国の地。だけど愛する人のいる世界であり、俺が生み出した物がある世界でもある。

俺はふらふらと命を終えようとしている世界樹へ近づき、幹に手を押し当て額を近づけた。自分の意思ではないみたい、体が勝手に動いたのだ。

「・・・お前・・・」

命を終えようとしている大樹からは、歓喜の声が伝わってきた。他の誰にも聞こえはしない心の声となって、俺の中に。

「レン・・・どうしたんだ？」

デイの呼びかけが遙か遠くから聞こえるような気がするのはどうしてなのか。

俺の心はここではないどこかへと行ってしまっていた。

目を閉じた、瞼の裏に映っていたのは光輝く世界と一本の大樹。一目見てそれは世界樹であり、この世界なのだと知れる。けれど、俺の知っている世界とはどこか・・・何かが違う。これは一体何なのだろう。

俺の知っているものと、同じだけど違う。

「・・・え？」

急に背後から声をかけられたような気がして俺は振り返った。そこには一人の男が立っていて、俺はその男を知っていた。

知っている。俺はこの人を知っているのに、どうして名前が出てこないんだ。光輝く銀髪も、愛して止まない灰色の瞳も何もかも。よく、知っているのに。

「――・・・」

男が口を開き俺の名を呼んだ。その名に違和感を覚えた。・・・あれ？俺って、そんな名前だったっけ・・・。

目の前の男は俺の名を何度も呼び、いつしか瞳から涙を流していた。何度も俺の名を口にしては涙を落とすその男に、俺は何も出来ず見つめるだけで。

ああでも、もう時間がない。お願いだから愛しい人、そんなに泣かないで。

「私は・・・ここに居るから、泣かないで・・・」

スガタカタチヲカエテモ、
ワタシハイツデモココニイル。
アナタノソバニズットイルカラ。

・・・―――。

「だからもう泣かないで。」

伸ばした指先を男が掴み、自分の口元に寄せてまた涙を落とす。
滴が俺の指を濡らすと胸に痛みが走った。

そんなに泣かないで欲しい、だってこれは最期の別れではないの
に。

俺の命が終わる訳ではないよ。ずっと、この世界と共に生きてゆ
く。あなたを一人にはしないから・・・。

やがて目の前の光が急速に増して、眩しくて俺は目を閉じてしま
った。けれど光は収まるどころか更に強さを増していった。

気がついた。この光は、俺の中から発しているものなのだと。

「・・・ああ・・・」

愛しているよ、あなたを。

この世界を、この世界の全てを。

だから、命を懸けて守り抜いてみせる。

この体に溢れているのは愛ばかりなのだから。

第一章：第十二話

「レン！」

力強い声に名前を呼ばれて俺はハッと我に返った。

「あ……れ……俺今……」

「世界樹と呼応していた。……何か、見ていたのか？」

デイは両手で俺の腕を掴み不安げな顔をして俺を覗きこんでくる。
「何か……昔の記憶みたいなのが……、これって世界樹の記憶なのかな。」

でも世界樹の記憶にしては少しおかしい。だって、あれは確かに俺だった。

「？……なんか、よくわかんないや。」

「レンに大事がないのなら……いいんだが……」

髪を撫でてくるデイはまだ心配そうな顔をしていたけど、俺が「大丈夫」と笑うと小さなため息をついた。

「……あ、れ……」

ふと、さっき見ていたのと同じ光が目の前に舞い散り始める。デイも気づいたのか俺の肩を抱き寄せ辺りを見回していた。それが上から降り注いでいることに気がついた俺は光を追って上を見上げた。光の正体はすぐに分かった、命を終えようとしている世界樹が光を纏い始めていた。

「これは……」

絶句するデイは上を見上げたまま固まって動かない。俺も同じでただ目の前の光景を呆然と見ていた。

世界樹が全体に光を纏うと、突然突風が吹きつけた。空から吹く強風が地面に当たりそれが四方八方へと飛び散っていく。そしてまるでそれに合わせるかのように光を帯びた世界樹が、音も無く霧散したのは次の瞬間のこと。

突風に巻き込まれ一気に上空へと舞い上がった光は、光り輝く雪

のように空からゆっくりと舞い降りてきて。

産声を上げる新たな世界樹に、空を見上げる俺とデイに、降り注いだ。

「すごい・・・綺麗・・・」

「ああ・・・」

俺達はその光が尽きるまでずっとその光景に見入ってしまったていた。

あともう少しで光の全てが消えてなくなりそうになった時、妙な浮遊感が俺の体を襲い始めた。

強い力で体を引き付けられる感覚に、俺はひとり目を瞑った。

ああ。もう、時間が無い。

「・・・デイ・・・」

声をかけると事態を察したのか、デイが優しい眼差しで俺を見つけてくれていた。

最後だけど、一緒に綺麗な光景を見られて良かった。最後の最後で強く俺の心に刻まれた。この世界の美しさ、愛しさ。愛する人の存在を。

「必ず・・・コウシエンに行くんだ。がんばれ。」

「・・・うん、がんばるよ。デイ・・・俺・・・」

「毎日ここに来る。そして祈っているよ。」

泣かないと決めていたのに、涙が零れてしまう。

俺がデイに抱きつくと、デイもきつく俺の体を抱きしめてくる。少し離れた場所で俺達を見守っていたジャモンも、足音を立てずに近づいてくると俺に体を摺り寄せ、尻尾を体に巻きつけてきた。

「ジャモン・・・元気で・・・」

頭を撫でるとジャモンが一声、鋭く鳴いた。

「デイ・・・」

別れの言葉を言いたくない。けど、どうしようもない浮遊感が俺を連れて行こうとする。

涙でぼやける視界の中、最後の光のカケラが空中にその姿を消すと。

少しずつ、俺の目に映るデイの姿が歪んでいく。掠れていつてしま
う。

もう一度だけ名前を呼ぼうとしたけど、その前に俺の前からデイの
姿は消えてしまった。

これが全ての終わり。

これが全ての始まり。

あれが全ての終わり。

あれが全ての始まり。

まだ何も終わっていない。

まだ何も始まってはいない。

運命の嵐はもうすぐそこにやってきている。

第一章：最終話

デイの世界から戻って俺はいつもと変わらない日常を送っていた。俺が向こうの世界に行っていた時間はまるでなかったかのよう、目を覚ますとあの世界へ呼ばれた日の朝だった。

それが切なくて俺は起きてからほんの少しだけ泣いた。でもあの時間は確かにあった。

その証拠に俺のズボンのポケットには世界樹の種が入っていたから。その種だけが俺とあの世界を繋いでくれていた。

俺はその種を家の近くの山に埋めた。この木が成長したらデイと繋がる気がしたんだ。

それからの俺は、デイとの約束を守るために俺は練習に練習を重ねた。仲間たちからは「更に気合が入ったな」と散々からかわれたけど、そんなのはどうでも良かった。俺はデイとの約束を守る、そして胸を張って言うんだ。

だってデイは約束を守って毎日俺の応援をしてくれているはずだから、絶対に違えるわけにはいかなかった。たぶん、もう二度と会えない人との約束なのに。

それから二ヵ月後。甲子園の地区予選が始まり、俺達は順当に勝ち進んでいった。途中で仲間の一人が故障をしたりもしたが、大事無く何とか乗り切りめでたく地区予選を優勝で飾ることが出来た。試合終了を告げるコールを聞いた時、俺はマウンドの上に崩れ落ちてしまっていた。子供の頃からの夢を叶えたとか、兄さんを甲子園へ連れて行けるとか。

思ったのはそんな事じゃなかった。

俺の脳裏に浮かび上がったのはたった一人、デイの姿だけ。俺はデイとの約束を守れたのだ。自分の選んだ道が正しいのか間違っているのかは分からなかったけど、俺はデイとの約束を守れたことが一番嬉しくて仕様がなかった。

そして俺達は目指していた甲子園の土をめたく踏むことが出来た。ただ、二回戦で負けてしまったけど。

目標は達成したから俺は満足していたし試合内容も納得のいく結果だった。さすがに二回戦敗退をしたその日は悔しくて泣いたけど、俺達は全力を出し切ったから誰もが満足をしていた。

「廉、監督がお疲れ様会するってさ。行くだろ？」

キャッチャーの柿崎が俺の肩を叩きながら言ってきた。

甲子園球場から電車を乗り継ぎ地元へと帰ってきたのは試合を終えた日の夕方。

俺は少し考えてから、

「いや、悪いけど俺は帰るよ。」

と、申し出を断ろうとした。

「えー！何言ってるんだよ！お前が一番の功労者だろ。つれないこと言うなよな。」

しかし俺の返事が意外だったのか、柿崎が不満そうな顔をしてくる。

「ごめん。どうしてもすぐに行きたい所があるんだ。」

「行きたいとこって、だってお前・・・これが最後だぞ？俺たちの夏は終わっちゃったんだから、もう野球はしないんだぞ？仲間たちと騒げるのだって今が最後になるのに。」

「・・・そう、なんだけど・・・。」

煮え切らない返事をする俺を柿崎は逃がそうとしなかった。

「納得の行く事情じゃないんだったら俺は帰るのは許さん。甲子園に行けたのはお前のおかげなんだから、主役がいなくてどうするよ。」

肩を掴む柿崎の手が強く俺を引きとめようとする。それでも答えようとしないうちに柿崎はふと手を下ろした。

「廉、俺たち三年間バッテリー組んできた仲だよな？」

「・・・ああ。」

「その間、隠し事はお互い一切してこなかったよな？」

「そうだけど。」

「夫婦みたいなもんだからな。」

至って真面目な顔でそう言ってくる柿崎に俺は苦笑を浮かべた。

「そうだな。三年間、夫婦みたいだった。」

「だったら、言えよ。俺達の夏は終わってバッテリーも解散になるけど、まだ解散してないんだから。」

「・・・柿崎・・・」

「ユニフォームを着てる間は俺たちはバッテリー。隠し事は一切なし！」

柿崎が興味本位で聞いてきている訳じゃないのは目を見れば分かった。

俺はグツと唇を噛み締めた。言っただうする、という気持ちと相反してこの苦しい思いを吐き出したい気持ちがあった。デイと別れてから二ヶ月、俺はずっと苦しかった。野球をしていてもデイのこ とばかり考えていた。

誰かに言えば少しは軽くなるかもしれないと思ったこともあるけど、誰に、何を、どう言えばいいのか分からなくて結局言わずじまいで今日まで来た。

言った所で信じてもらえるような話ではない、それもまた俺の口を固く閉ざしてしまっていた。

「廉？」

柿崎が俯いて動かない俺を覗き込んでくる。

「・・・廉・・・」

俺の目に涙が滲んでいるのを見た柿崎は声のトーンを落とした。

その時、いつまでもやってこない俺たちに遠くから監督が声をかけてきた。

「風羽！柿崎！何やってんだ、置いていくぞ！」

俺は慌てて涙を拭い、行けないことを監督に言おうと顔を上げる。それを柿崎が制した。

「監督ー、俺たち最後の夫婦の会話してくんで、先に行って下さ

い！後で追いつきますんで！」

「・・・柿崎」

「はい！場所はいつものところですよ？・・・はい、了解です！」

柿崎は勝手に監督に話を取り付けると、呆気にとられる俺を引きずるようにしながらグラウンドに連れて行った。

「柿崎・・・」

「・・・俺さ、ちょっと気づいてたぞ。」

二人でベンチに横並びに腰掛けると柿崎が言った。

「二ヶ月前くらいから、お前の様子がおかしいこと。」

まさか気づかれているとは思っていなかった俺はまじまじと柿崎の顔を見てしまった。

「何だよ、その顔。俺だってそこまで鈍感じゃねーぞ。・・・それに、長年バッテリー組んできたお前のことじゃん。気づかない方がおかしいだろ？」

「・・・ごめん・・・」

「謝って欲しい訳じゃないって。」

「・・・うん。」

遠く、夕日が空を真っ赤に染めていく。ぼんやりとそれを眺めながら俺は、考えた。

柿崎はたぶん、ちゃんと話を聞いてくれる。そしてそれを誰にも言わないでいてくれる。それだけの信頼があった。

「・・・何から言ったら、いいんだろ・・・」

「・・・ゆっくりでいいからさ。」

柿崎が頭の後ろで腕を組み、背もたれに体重をかける。ギシギシと古いベンチが音を立てた。

「・・・大会が始まる少し前に、俺・・・好きな人が出来てさ・・・」

「うん、そうか・・・って、マジで！」

ガバリと身を起こし柿崎が目を真ん丸くして俺を見てくる。

「何だよ、恋バナかよー。そっち方面とは思ってもなかったぜ・・・」

「・・・そっか？」

高三男子としては、そっち方面に思考を持っていてももらえないのはちょっと物悲しいものがある。

「だってお前、モテるくせに浮いた話なんか一切なかっただろ。」

「モテはしてないと思うけど・・・そうだな、誰かと付き合ったりとかしたことないな。」

「それで？お前を射止めたのはどんな人なんだ？」

さっきまでとはうって変わった興味津々な態度になった柿崎に、

俺は「年上の人だよ」と笑いながら言った。

目を閉じただけで、瞼の裏にデイの姿が浮かび上がってくる。どんなに会いたいと願っても夢の中にすら出てきてくれない、デイの薄情者め。

「でもさ、それならもつとご機嫌になるんじゃない？何かお前・・・」
「それが・・・もう、会えないんだ。」

これを言葉にするのは辛かった。「そう」なのだと自覚をすることになるから。

「もうって、何でだよ・・・もしかして」

柿崎の言葉尻がすばまっていつて、俺は柿崎が何を言いたいのか察した。

「違う、死んでないよ。」

「？それなら会いに行けばいいだろ。」

「どこにいるのか分からないんだ。」

「メルアド交換してないのか？番号は？」

「あっちがそういうの、持ってないんだ。」

「マジで？だったら住所は。」

現代の連絡手段が一切通用しない人だと知って、柿崎がおろおろとします。

「分からない、どうやってそこへ行けばいいのかも分からないんだ。」

その俺の言葉に柿崎が表情を固くした。

「・・・お前さ、それって・・・」

表情が悲壮感にまみれていて、俺はつい笑ってしまった。俺も顔に出やすいけど、こいつほどじゃあないな。

「騙されたとかじゃないから安心しろ。ただ、会った時の状況がちょっと特殊だったんだ。」

「特殊？」

いくら柿崎にでも、あの状況をするのは躊躇われ、俺は言葉を濁した。

「分かっているのは、きっともう二度と会えないってこと。どうしても、どうやっても会えないんだ。」

遠くを見た。その先にはいつもデイの姿が見えていた。

「・・・そうその目、お前・・・急にそんな顔するようになったんだ。」

「・・・柿崎？」

「見てて、苦しくなるんだ。」

柿崎はまるで自分が苦しむように胸の上をギュッと掴んだ。

「・・・なあ、本当にその人には会えないのか？」

「会えないよ・・・」

「だって、死んでる訳じゃないんだろ？ だったら・・・」

柿崎は必死に俺に詰め寄ってくる。まるでこのことは柿崎の出来事のようなのだ。

同時に、そこまで考えてくれているのが嬉しかった。

「会えたらどんなに嬉しいかな。」

デイ。

俺は空を仰いだ。どこを見てもその先にはデイが居る。あの銀色の髪が、灰色の目が、俺を包み込む大きな体が、手が。

懐かしいあの声が。

デイ。

会いたい。

「・・・好きなんだな、その人のこと。」

ポツリと柿崎が言った。

もう、好きとかじゃないんだ。

「愛してるよ。」

「・・・廉・・・」

「俺もう、恋は出来ないと思う。」

恋は出来ない。それくらい、デイに心を奪われている。

あんな離れ方をしたから余計に。自分でそれを選んだから文句はないけれど、どうしようもなく心を変えられなかった

「でも、もう会えないんだろ？そんなの辛いのか？」

柿崎の言葉に、急に胸に込み上げてくるものがあつた。

「・・・辛いよ。でも、もう駄目なんだ。」

声が震えて、掠れた。

涙が頬を伝って落ちていく。

「それでも、俺はもうあの人以外に心を預けられないんだ。」

会えないことが、想いをどんどん強めていく。

馬鹿みたいな話だ。一緒に居たのはほんの数日なのに。もう二度と会えないのに。

「廉。」

柿崎がくしゃりと顔を歪めた。今にも泣き出しそうな顔をしている。

「馬鹿だって、分かってるんだけどな。こればかりはどうしようもないみたいだ。」

違う人を好きになれたらどれだけホッとするだろう。こんなに辛い状況でこれから先をずっと過ごしていかないといけないなんて。だけ。

解放されたいとは思わない。

「柿崎、ありがとな。話聞いてくれて。楽になった。」

「廉・・・」

「俺、もう行くよ。報告しなきゃいけないんだ。」

音を立ててベンチから立ち上がると背後から柿崎が声をかけてきた。
「報告って、その人に？」

「甲子園に必ず行くって約束したんだ。事後報告、しないと。」

「どうやって伝えるんだよ。連絡手段がないんだろ？」

柿崎が俺を追いかけるように腰を浮かせる。

「一つだけ繋がってるものがあるんだ。会えないから、それに報告してくる。」

世界樹だけが俺とデイを繋げてくれている。あれが全て現実のことだったと教えてくれている。

デイは世界樹の元に毎日来てくれているはず、そう約束をしたから守ってくれていると信じてる。

「・・・そっか。」

それ以上はもう何も言わず、柿崎は最後には微笑んでくれた。

「じゃあ、気をつけて行けよ。」

「おう！」

差し出された柿崎の拳に俺は同じように拳を押し当て歯を見せて笑った。

そして世界樹へと向かって歩き出した。

柿崎と別れてから俺はユニフォームのまま、バットとグラブとボールを入れたカバンを持って疲れた体を引きずりながら何とか世界樹のところへ辿り着いた。

世界樹はつい二ヶ月前に植えたにも関わらず、驚く速さで成長をして高さはもう他の木と同じくらいにまでなってしまった。

「まあ、あっちの世界樹もあんだけ速く成長したからな。」

俺は一人呟くと、ポケットから小さな小瓶を取り出しその中に入っていた土を世界樹の木の根元に撒いた。

「デイ。甲子園、行ったよ。約束・・・果たしたから。」

あとはもう一つの約束、プロになることだけだ。気が遠くなるくらい難しいことだけど、この約束だって守らなければ駄目だ。

幹に手を突き、額を押し当てた。どうかデイにまで届いて欲しい。そして叶うのならデイにもう一度会いたい、夢の中でもいいから。

会いたい。逢いたい。

ずっと我慢してきた。こっちへ帰ってきてからずっと、デイのことを想っても泣かないと決めていた。でも約束は一つ守ったから、今だけはどうか許して欲しい。

「デイ・・・」

頬から伝った涙が地面に落ちて、その雫が土に吸い込まれていった。涙が地面に染み込み黒い痕を作った。俺はしゃがみこみその土を手取る。

握り締めてはそれをばら撒き何度かそれを繰り返すと、俺は土に汚れた手で世界樹の幹に触れた。手の平から温かいものが流れ込んで来る。

自分が生み出したものだからなんだと思うけど、世界樹からはいつでも鼓動が伝わってくる。幹に触れた手の平からも、風に吹かれて鳴る木の葉からも。

「向こうの世界樹は元気に育ってるか？」

繋がっているのなら伝えて欲しい、どうかデイに。

約束を守れたことを。

俺は元気にしているよと。

変わらず愛しているよ、と。

世界樹にそっと唇で触れる、すると幹の内側から呼び声が聞こえた気がした。

「・・・え？」

顔を上げて樹を見ると、どこからともなく声が聞こえてくる。微かなものだったけれど、気のせいじゃない。

「何・・・？何て言ってるんだ？」

何かが聞こえる、一体何が・・・俺は世界樹を見上げながら声を聞き取ろうと意識を集中させた。

微かなその声は男とも女とも取れない声をしていた。どこか聞き覚えがある気がするのは何故なのか。俺は、この声を知っていた。

『……来るな。』

はつきりと聞き取れたのはその一言だけ。俺は世界樹に縋りつくと声を上げた。

「来るなって何がだよ！デイに何かあったのか？」

でもその声はそれきり途絶えてしまい、胸がひやりと冷たくなった。俺はあの声を確かに聞いたことがある。俺はどこであの声を聞いたんだ？

それに来るなって言われたって俺はもう向こうの世界には行けないはず。

頭がパニックになって、真っ白になりかける。

「……いや待て。待て待て落ち着け、俺。」

混乱する気持ちを何とかなだめようと俺は世界樹から離れ深呼吸を繰り返すと、辺りを見回した。日はすでに傾き空が真っ赤に染まっている。風は穏やかで俺を包み込むように緩やかに吹いていた。空と風だけはどちらの世界も同じもの。

「………あ。」

一瞬、風に乗って懐かしい匂いがしたけれどそれはすぐにかき消えてしまった。

二つの世界は遠いはずなのに、こんなにも近くに思えるのは何故なのか。

さっきのあの声の主は一体誰なのか、どうして聞き覚えがあったんだろう。

「……あの声、どこで……」

記憶を手繰り寄せ俺は声の主が誰なのか考えた。

向こうの世界に居る時に聞いた声……？でもデイの声でもなければライカの声でもない。俺が向こうの世界に居る時に関わったのはその二人くらいで。

「………」

無意識に世界樹を見上げた。変わらず風に吹かれ葉は心地良い音

を立てている。

再び目線を目の前の幹に移すと、それを見て俺は息を呑んだ。最後にデイと二人で見たあの光が世界樹の幹から零れ始めていて、幹に触れている俺の手を包み込み始めていたのだ。

「！」

思い出した、あの声をどこで聞いたのか。

直後。え、と思う間もなく俺の体はふわりと覚えのある浮遊感に身を包まれた。とっさに目を瞑り身を固くすると、一気に体を引っ張られた。

次にはもう鼻に付く濃い緑の匂いがしていて、恐る恐る目を開くと俺はさっきまでとは違う場所に居た。

呆れるくらいの大樹が目の前に佇んでいる。

「この木って・・・」

これは世界樹だ、デイの世界の世界樹だ。間違いない。さっきまで俺が触れていた地球で植えたものとは明らかに大きさが違っていた。

俺は呆然としながらも世界樹に手を触れた。力強い脈動と、伝わってくる歓喜の声。

まさか、という期待とそんな馬鹿なという気持ちを抱きながら。訳が分からないままに俺はゆっくりと後ろを振り返った。

「・・・っ」

夢なんかじゃない、焦がれた銀色が・・・灰色の瞳が。俺のすぐ後ろにあったのだ。

「・・・デイ・・・」

本物のデイがそこにいる。

それ以上は声が出なかった。自分の身に起こっている出来事が理解出来なくて俺はしばらくの間ポカンとしてしまっていた。

「デイ・・・」

間違いなく俺の目の前には恋焦がれた人の姿があるのだ。両目から

ぼろぼろと涙が零れ落ちる。

初めは事態を理解出来なかったのか、デイもまたポカンとした顔をしていた。でもやっと事態を把握したのかもの凄い勢いで俺に近づいてきたかと思うと、骨が折れるんじゃないかっていうくらいの力で俺を抱き締めてきた。

「レン！これは夢か？」

俺は抱きしめられている腕の力と温もりが本物だと知ってしゃくりをあげた。

「・・・じゃ、ない・・・」

「まさか、どうして・・・」

俺をきつく抱きしめながらデイはうわ言のように言った。耳元で聞こえてくるデイの声をどれだけ聞きたいと願っただろう。

「夢じゃない、デイが・・・」

ここに居る。

望んでも叶わないことだと諦めていたのに、俺は今デイに抱き絞められている。

「・・・レン・・・」

「・・・デイ」

名前を呼び合える日が来るなんて思ってなかった。俺はしゃくりを上げ、震える手をデイの背に回した。耳元にデイの唇が触れ、囁くほどの声音で何度も何度も名を呼ばれた。

「・・・あいたかった・・・」

「レン。」

「・・・あい・・・たかった、よお・・・」

胸が逆巻いて息もまともに出来ないで居ると、頬に手をかけられ顔を上げさせられた。額が触れるくらいに顔を寄せ合うと、俺の目からはぼろぼろと涙が零れ落ちる。泣きじゃくる俺の顔にいくつも口付けを落とすデイの腕の中で俺は深いため息をつき、目を閉じた。そのまま俺たちはどちらからともなく口付けを交わし合い、何度も

何度も角度を変えて口付けを飽きるまで繰り返した。

あまりのその激しさに俺はその場に崩れ落ちてしまい、でもデイはそんな俺を口付けながら追いかけてくる。最後には二人で地面に座り込み、会えなかった時間を埋めるように抱き合い終わらない口付けを続けた。

「・・・レン。」

ようやく唇を離すとデイがすぐ側から俺を覗き込んでくる。優しく髪を撫でながらあちこちを啄ばむように口付ける。一緒に指先で俺の涙を拭った。

「一体、どうやってここに？」

「分からないんだ、ただ俺の世界に植えた世界樹に・・・」

「レンの世界に世界樹が？」

驚きに目を見開くデイに、俺は告げていなかった事実を告げた。

「あ、の・・・言わなかったんだけど、種が二つあったんだ。それで、一個を持って帰っちゃったんだ。」

「ごめん、と俺はつい俯いてしまう。」

「・・・そうなのか？」

「・・・ごめんなさい、でも・・・」

そっと顔を上げるとデイは微笑んでいた。

「こっちの世界樹は見ての通りちゃんと成長しているから、それは問題ないだろう。そうか、世界樹の種は二つ生まれていたのか。」

俺はデイが怒っていないことにホッと息を吐いた。

「うん。それで俺、あっちの世界樹のところでデイに報告をしてて。」

「報告？」

「うん、約束守れたんだ。デイ、俺甲子園に行ったよ！」

「そうなのか！がんばったんだな、レン。」

デイが変わらず優しい目で俺を見てくる。俺は童心に帰った子供のようにデイにしがみつき、胸に顔を埋めた。

「約束、守りたかったんだ。守って、それを報告したくて。」

「・・・ありがとう、レン。」

「それで甲子園の土を世界樹の根元に撒いて、それでデイに会いた
いって思ってたら・・・来れちゃった。」

まだ信じられない。さっきまではあんなに苦しんでいた心が、今こ
んなにも喜びに満ちている。

デイと会えた、たったそれだけで。

「会いたかった、レン。」

「俺も、会いたくておかしくなりそうだった。」

俺たちはまた口付けあった。ずっと、こうしていたい。

けれど俺のその願いは叶わなかった。デイがすぐに唇を離してし
まったのだ。

それが寂しくてつい顔に出てしまうと、どこか落ち着きをなくし
ているデイが、そわそわとしながら俺をジッと見つめる。

「デイ？　どうかしたの？」

俺の言葉にデイは俺を覗き込み「もう言っても大丈夫か？」と何か
を伺いたててくる。

「ずっと、決めていたんだ。次にレンに会うことが出来たら必ず言
おうと。」

「・・・？」

何のことか分からないまま俺が頷いた。

するとデイは見たこともないくらい満面の笑みを浮かべきつく俺
を抱き締めると、

「愛してる！　誰よりもレンを愛してる！」

高らかにそう叫んだ。

第一章：最終話（後書き）

第一章終了になります。読んでくださりありがとうございました。
引き続き第二章も順次アップして行きたいと思っていますのでどうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1700u/>

Eternal Love

2011年7月18日00時11分発行